

道東における「オホーツク文化」年代観の改訂 —「遼時代の素焼土器」と伴出遺物をめぐって— (前篇)

柳 澤 清 一

はじめに

近年に刊行された論著や図録を参照すると、「オホーツク文化」の終焉は8世紀代か、又は9世紀代に遡るとされている。それに対して擦紋文化の終焉は遥かに新しく、12~13世紀代に求められるという。しかしながら本邦先史考古学の方法論に則り、大陸側と北海道島の編年秩序を精密に対比すると、両文化の終焉に関しては、通説とまったく異なる年代観が導かれると思われる。

筆者は1999年以来、通説の北方編年体系について組織的に見直し作業を進め、論著として纏めてきた(柳澤1999a・b, 2008c・2011b)。本稿では、当初から将来の検討課題としていたモヨロ貝塚の「遼時代の素焼土器」(名取1948b)と、その伴出遺物に焦点を当て、環オホーツク海域編年の視点から、道東「オホーツク文化」の終焉に係わる新しい年代観を改めて提示したい。

以下の行論において、反復的に操作する資料は優に千点を超える。観察フィールドの範囲もきわめて広大である。また、論述は簡略に努めるつもりであるが、相当な紙数を費やすことは避けられない。そこで初めに本文の構成を示しておきたい。

はじめに

1. 大陸系の渡来文物をめぐる学史の検討
2. 「遼時代の素焼土器」の発表から山内博士の「新北方編年」説へ(前篇)
3. 契丹・遼代土器の編年から見た「遼時代の素焼土器」
4. 北海道島編年の見直しから「遼時代の素焼土器」編年へ

5. モヨロ貝塚11号竪穴の文物と道東「オホーツク文化」年代観の改訂 おわりに

1. 大陸系の渡来文物をめぐる学史の検討

大陸から渡来した文物を用いて、「オホーツク文化」の年代が具体的に検討されたのは、いつ頃からであろうか。戦前の代表的な研究を一覧しても、そのような事例は見つからない。おそらく戦後に、登呂遺跡に続いて実施されたモヨロ貝塚の調査（1947・1948年）を契機として、年代学的な研究は北方史の中核的なテーマとして浮上したのであろう。

1) 名取武光の発言からの経緯

近年に刊行された北方考古学に関する概説書や展覧会の図録を通覧しても、「遼時代の素焼土器」（第1図，名取1948b）に言及している例は見当たらない。「オホーツク文化」に係わる大陸文物を総合的に整理した菊池俊彦氏の著作（菊池1995a）を除くと、『二ツ岩』（野村・平川編1982）が刊行された1982年以降では、この資料を用いて「オホーツク文化」の年代に触れたものは、皆無に等しいように思われる。そのとおりならば、この稀代の貴重な文物は、大方の研究者の脳裡から消去されており、現状では「忘失」された状態にあると言えよう。

したがって、通説編年がほぼ定説化している現在、1982年以前に一般的であった「オホーツク文化」の年代観に、北方史の枠組みを根底から揺るがす問題が潜んでいるとは、誰も容易に想像できないであろう。1940年代から1960年代にかけて、「オホーツク文化」や擦紋文化の年代を検討する手掛かりとして、「遼時代の素焼土器」は最も重要な文物の一つであった。その年代学上の意義は、果たして『二ツ岩』（1982年）の刊行とともに、一朝にして失われたのであろうか。



第1図 「遼時代の素焼土器」片（モヨロ貝塚第11号竪穴出土）

この北方史にまつわる年来の疑問点を解くために、以下、大陸系の渡来文物を利用した「オホーツク文化」年代観の歩みをたどり、本稿で検討する論点を明確にしたい。

2) 河野広道による「オホーツク文化」終焉の年代観

河野広道の北方史の枠組みと編年観の成り立ち、それらの学史上の意義については、旧稿において繰り返し触れて来たところである（柳澤1999b・2008c・2013b：91-96、2013c：106-113）。

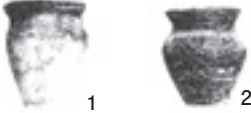






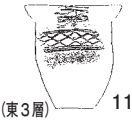

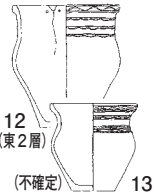
「オホーツク式土器」について河野は、「型」別による独自の細別案を編成し、『斜里町史』や『網走市史』の中で標本例を提示して詳しく解説している。それらの序列は、相次いで調査されたモヨロ貝塚やウトロチャシコツ下遺跡の層位事実に基づくものであった（河野1955・1958）。その詳細については上記の旧稿を参照されたい。

第2図は河野の「型」別編年案と、宇田川洋氏が公表したウトロチャシコツ下遺跡の資料を対比したものである（宇田川編1981、柳澤2013c：108-113）。擬縄貼付紋土器（4・10）とソーメン紋土器3（5・6・B）の間で、トビニタイ土器群Ⅱの「古い部分」（A・11例）が検出されている。これは1999年以来（柳澤1999b：64-67）、今なお通説では容易に説明し得ない層位事実として注目されよう。

さて河野は、この「型」別編年の提案に先立ち、モヨロ貝塚の調査をふまえて次のように発言している（米村編1949：164、（ ）：筆者の補記）。

- (1) 10号竪穴は「果して（まゝ）二重か四重か、もっと複雑に幾代も同じ穴を利用し、家だけを建て替えたものかはっきりしません」
- (2) 「上と下だけの床面を問題にするならば、下床から出る遺物（刻紋土器）は平安朝の初めから（A.D. 794年以降）奈良朝（A.D. 710年以降）のものと思われ、上床は平安朝後半（A.D. 973～1191年）の遺物（貼付紋系土器）と思われ（両者には）大体において二世紀ぐらいの開きがあると考えております」

これは昭和23（1948）年度の調査中に開催された、「モヨロ貝塚を探る」という座談会での発言であるが、翌年の11月には『北海道先史学十二講』（米

	河野 (1955・1958)	ウトロチャシコツ下	渡来文物
刻紋土器			
擬縄貼付紋土器			-
			
ソーメン紋土器			-
			

第2図 河野広道の「オホーツク式土器」編年と大陸文物の対比

村編1949)に掲載された。名取武光が「遼時代の素焼土器」に因み、「オホーツク文化」年代の一端をA.D. 1018年に比定したのは、その座談会の後に刊行された『モヨロ遺跡と考古学』の巻末であった(名取1948b)。河野が比定した11~12世紀という年代は、名取が公表した「遼時代の素焼土器」を用いなければ容易に想定できない。したがって河野は、早々のうちに「遼時

代の素焼土器」に関する情報を入手していたと推測される。

また、河野が調査したモヨロ貝塚10号竪穴から出土した土器の内容は、大きく擬縄貼付紋土器とソーメン紋土器の2種類に分けられる（佐藤1964 b）。河野はいずれかを特定せず、どちらも「平安時代の後半」、すなわちA. D. 1192年以前としている。鎌倉時代まで降ると想定していないこと、また下層竪穴の刻紋土器と上層のソーメン紋土器の年代差を200年と推定していることが、今では「忘失」された年代観であっても、注目に値する見解であると言えよう。

また河野は、昭和23年9月に開催された「先史学講座」の講義をまとめた論文において（河野1949. 11：41, ()：筆者の補記）、

(3) 「オホーツク式土器は大陸からはいつてきた文化であり、八、九百年前(A.D. 1148年, 1048年)以後は消えてしまい、(その後)刷紋(まゝ)土器も途中でなくなっております。このころから日本からの漆器、木器が非常にたくさん使われるようになったのであります」と述べており、(1)・(2)と一致した年代観を表明している(米村編1949：41)。ところが、それに先立つ座談会では、「オホーツク」と擦紋文化の関係に触れて、(1)~(3)とは異なる年代観を述べている（前掲：171）。

(4) 「モヨロ文化は縄文文化から金石併用時代、古くも二千年前よりさかのぼりません。大体そのころ以後おそらく鎌倉時代まで千年以上続いたと思われれます。オホーツク式文化は縄文土器時代にはなく、擦文になってから併行して見られる」

ここで鎌倉時代まで降るとした見解の根拠は明らかにされていない。擦紋文化と並行関係にあるという認識と、両者の「文化要素、経済交流が相互に行われた」とする座談会の発言が、その根拠を推論するヒントになるであろう（前掲：171）。なお「先史学講座」の小論には、その後「遼・金代」に比定された大陸文物への言及は、駒井和愛の軟玉製環石に関する発言を除くと、全く見当たらない（前掲：167）。

この点は少し奇異に思われるが、おそらく、大陸文物に関する情報をまだ入手していなかったのであろう。他方、この座談会に参加していない名取武光は、『北海道先史学十二講』（1948年11月）に先立ってモヨロ貝塚調査の

速報を執筆し（1947年12月）、『民族学研究』誌上（1948年3月）に発表している（名取1948a：30-31、傍点・下線・ゴシック文字：筆者）。

- (1) 「オホーツク式文化は、金石併用時代のもので（中略）今を去る千二、三百年（A.D. 747年，847年）前を前後する幾百年かの間、オホーツク海の荒波を背景として栄えていた」
- (2) オホーツク文化の遺跡では、「本邦の奈良平安時代の蕨手刀や管玉を出すのみでなく、隋・宋時代の支那文化の所産である軟玉の耳環、遼金時代の青銅の鈴、遼時代の土器片、雷紋ある骨器など、アジアの北方を経て樺太から流れたと思われる文物をも含んでいた」

この発言より一ヶ月前、名取に対して遼・金代の文物を教示していた駒井和愛は、1947（昭和22）年度のモヨロ貝塚の調査成果と「遼時代の素焼土器」（昭和16年：1941年出土）の観察をふまえて、次のように発言している（駒井1948. 1、下線：筆者）。

- (1) オホーツク式土器に似たものはホロンバイルの細石器遺跡で見えられており、青銅製鐸の形は遼代ごろのものに似ている。

また児玉作左衛門も、次のように駒井・名取と一致した年代観を明らかにしている（児玉1948. 4）。

- (1) 「殊に青銅製の「鈴」（鐸）^(註1)は原田博士によれば支那の遼・金時代のものに極めてよく類似している」

このように1947年から1948年にかけて、特にモヨロ貝塚調査の終了後に、「オホーツク文化」の実年代や擦紋文化との関係性、あるいはモヨロ貝塚人の系統性などをめぐって、議論が俄かに活発化した様子が認められる。そうした動向をふまえ、斜里・網走の市町村史（先史時代）の執筆を委嘱されていた河野広道は、モヨロ貝塚やウトロチャシコツ下遺跡の新資料を利用して座談会での発言をさらに深化させ、新しい「オホーツク式土器」編年とアイヌ文化の成立に係わる新学説の発表に踏み切った（河野1955, 1958）。その要点を摘要してみよう（下線・（ ）の補記：筆者）

- (1) 「オホーツク式土器人の衰微の原因については不明であるが、恐らく元の樺太侵略（A.D. 1286～1308年）以後、大陸北方における諸民族間の勢力関係に変化があり、オホーツク式土器人の大陸基地が

覆滅して、交通が中絶したことが大きな原因をなしているのではないかと想像される。」（河野1955：9）

- (2) 「擦紋式土器人とオホーツク式土器人は、奈良平安朝期（A.D. 710～1192年）を通じてオホーツク海岸の各所をモザイク状に（棲み分けて）占拠し、対立していたが、鎌倉期乃至鎌倉期を距ること遠からざる時代にオホーツク人は擦紋式土器人に吸収された。」（河野1955：11）
- (3) ウトロチャシコツ下遺跡の層位事実によると、「オホーツク式文化の終末期は鎌倉・室町頃であることが推定されるのである。」（河野1955：20）

「オホーツク文化」の終焉と樺太への元の侵略を関係づけた点は、河野のオリジナルな学説と言える。しかし、オホーツク人と擦紋人の「棲み分け」については、名取がその原型となる所見をすでに発表していた（名取1948a：313）。おそらく戦前から協同研究を続けていた両者は、ともに同じような見解を抱いていたのであろう。

さて河野は、年代観に係わる遺物として名取がA.D. 1018年に比定した「遼時代の素焼土器」（第2図14）について『網走市史』の中で言及している。また、特殊系統の鉄器（網走式刀、網走刀子、大陸系鉾など）、大陸系鈴などにも触れている（河野1958：123-126）。しかし駒井・原田・児玉のように、それらを「遼・金代」に比定し、「オホーツク文化」の終焉年代を検討する記述は見当たらない。

とはいえ「遼・金代」とされた文物の年代は、そのとおりであれば10世紀中頃～13世紀の前葉に相当する。河野は「オホーツク文化」の終焉年代を鎌倉時代（A.D. 1192～1333年）ないし「鎌倉期を距る（まゝ）こと遠からざる時代」と想定している。前者の年代観は、まさに「遼・金代」（A.D. 946～1125年、1116～1234年）に一致する。したがって大陸系の渡来文物が、新しい年代推定の根拠になっていると考えられる。おそらく「遼時代の素焼土器」（15：A.D. 1018年比定≒14）や北宋銭（16）は、「オホーツク文化」終焉期のソーメン紋土器（5・6・B=12・13）の時代に位置づけた、と推定される。

それに対して、後者の「鎌倉期を距ること遠からざる云々」という時代は、平安時代末とも受け取れるが、その場合は「遡る」という表現がふさわしいであろう。そのように理解すると、この記述は南北朝・室町期(A.D. 1336～1573年)の前半頃の年代を想定していたことになる。これは金代(A.D. 1116～1234年)はもちろん、元の樺太侵略(A.D. 1286～1308年)より遅れる年代である。しかし、その時期に「オホーツク文化」が「消滅」し、擦紋文化に吸収されたとする証拠は、大陸から渡来した文物と鑑定された資料の中には見当たらない。


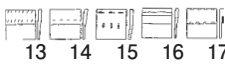





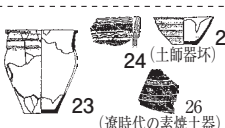

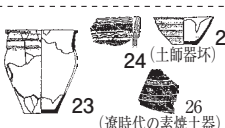
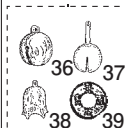

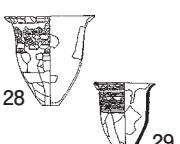

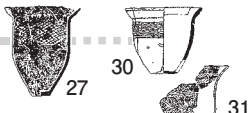

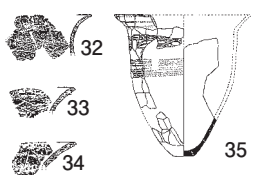

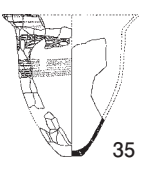


それでは大陸文物の実年代が金代、すなわち12・13世紀まで降るものが、果たして存在するのであるか。『斜里町史』や『網走市史』(1955・1958年刊)以後に展開された研究では、その点を含めて渡来文物の年代はどのように検討されたのであろうか。

3) いわゆる「東大編年」の年代観

「東大編年」(駒井編1964, 大井1970a)は周知のとおり、先の河野編年(河野1955・58)とともに、今日の通説編年のルーツをなすものである(第3図)。そのオホーツク式土器と擦紋土器をめぐる年代観は、数値のうえで現在の通説と大きく異なる。しかし、擦紋土器の方が遅くまで存続したという点では、通説と全く変わらない。山内博士は、「東大編年」が発表された同じ年に真逆の「北方編年」説(山内1964)を再提唱しているが、現在では学説上の市民権を失っている。

相克する両者の編年観の成り立ち、その問題点については、旧稿(柳澤2013b)において詳しく検討している。詳細はそれを参照されたい。今では通説と年代上の齟齬があるため、「東大編年」はほとんど顧みられることがない。しかしながら土師器と変容した土師器、それに擦紋土器を一系統の土器群と捉え、それらを「擦文土器」と見做す系統観は、そのまま通説編年に踏襲されている。また「オホーツク式」の「第Ⅱ群」と「第Ⅰ群」の序列(21・22→23・24)も、その呼称を変更しただけで、そのまま「藤本d群→e群」(藤本1966)の序列として継承されている。さらに、トビニタイ遺跡における竪穴の重複を利用した、「Ⅲ群→トビニタイ土器群Ⅱ(23・24→28～30)」

道東における「オホーツク文化」年代観の改訂（前篇）

		擦文土器		オホーツク式とそれに準ずるもの		渡来文物		
奈良 平安	8世紀	第1(類)		I群以前				
	9世紀				I群			
	10世紀	第2(類)				II群		
	11世紀				III群			
	12世紀	第3(類)						
13世紀								
鎌倉	14世紀	第4(類)		第1類				
	15世紀							
室町	15世紀							
								
								

第3図 いわゆる「東大編年」の仕組みと渡来文物の対比（駒井編1964等，柳澤2013bより編成）

とされた編年観も、先史時代における不動の「史実」を物語るものとして、世代を超えて継承されている。

さて通説の編年案では、「東大編年」のⅡ群・Ⅲ群を8～9世紀の前葉とし、トビニタイ土器群Ⅱを10～11世紀前半と想定する。そして「Ⅰ群以前」の刻文土器A（13～17）を7世紀代の所産と捉える（熊木2011・塚本2012ほか）。それに対して「東大編年」では、上述したように各土器群の年代が1～3世紀に及んで大幅にズレている。他方、刻紋土器Aの年代を8世紀末～9世紀代に比定している点も注目される。3例の横走沈線紋を持つ「擦文前期」土器（擦紋Ⅱ：佐藤1972）に刻紋土器Aを対比する「東大編年」の根拠は、いったい何に由来するのであろうか。

1951年のモヨロ貝塚（第3次）調査では、2号墓において副葬品された「蕨手刀」と刻文土器Aが検出されている（駒井編1964：64-77、柳澤2012d：177-182）。道央における「蕨手刀」の年代観からすれば、それと共伴した刻紋土器Aの年代は、河野の年代観と同様に「東大編年」においても、自ずと8～9世紀代と推定されたであろう。

「東大編年」の総括の項では、「オホーツク文化」の年代に関しては、「平安時代から鎌倉時代にかけて、営まれていたと考えられる場合が多い」が、「ややさかのぼるとみられる資料もないわけではない」と指摘されている。さらに「オホーツク土器の盛行した時代が、8世紀頃から10世紀、11世紀に及ぶというように幅があったことには間違いがないであろう」、という結論が示されている（前掲：167-168、傍点筆者）。

ここで「ややさかのぼる」とされた資料が、蕨手刀と刻紋土器を伴う墳墓に該当するとすれば、後続するソーメン紋土器（「Ⅱ・Ⅲ群」）の年代は、何を根拠に推定したのであろうか。そこで、本州島の渡来文物によって終末期（第1・2類土器）の年代を決定する資料は全くない、という記述に注目したい（前掲：167）。事実、トコロチャシ遺跡の1号竪穴でソーメン紋土器（23）に伴出した糸切り底の「坏」（25）は、山内博士と異なり（山内1933）、「オホーツク文化」の年代を検討する資料として特に参照されていない。

したがって明記されていないが、「Ⅱ・Ⅲ群」に係わる年代の根拠は、「遼・金代」とされた大陸系の渡来文物に求めていると推察される。それでは、「Ⅲ群」のソーメン紋土器を11世紀代とした理由は何であろうか。「遼・金代」の文物が示唆する年代はA.D. 946～1234年にまで及ぶ。そのうち确实

に11世紀代を想定できるのは、名取がA.D. 1018年に比定した「遼時代の素焼土器」(26)に限られる。加工されたモヨロ貝塚の北宋銭（景祐元宝：39, 初鑄A.D. 1034年）の上限年代も、11世紀代の前葉に求められる。それに対して軟玉や鈴（36・37）・鐸（38）・耳環、鉾・曲手刀子などは、かなりの年代幅が想定されるから、その年代を11世紀代に絞り込むのは難しい。

他方トビニタイ遺跡における、「ソーメン紋土器（「Ⅱ群」：22）→トビニタイ土器群Ⅱ（28～30）・トビニタイ土器群Ⅰ（31）」なる序列は、「東大編年」において自明の大前提とされている。そして、これらの土器群（第Ⅰ類）は図示したとおり擦紋土器と並行的に変遷し、河野が想定したように「室町時代前後」（14～16世紀代）には「木器」に代替され、煮炊き具としての役割を終えたと想定されている（駒井編1964：152-157, 168-170）。

学史上において特に注目されていないが、このような編年観は、「オホーツク文化」終焉の要因を元の来襲に求める河野説（河野1955・1958）を暗黙裏に批判したものと思われる。また「遼時代の素焼土器」と北宋銭を以て、河野より古く「オホーツク文化」の終焉を11世紀代と想定した点は、トビニタイ遺跡の堅穴重複事例（「ソーメン紋土器→トビニタイ土器群Ⅱ・トビニタイ土器群Ⅰ」）に一義的に依存した仮説であると言えよう。

それでは、以上のように組み立てられた「東大編年」には、何も問題が無いのであろうか。すでに旧稿（柳澤2013bほか）で検討しているが、若干の論点を補足しておきたい。

- (1) 河野広道による擬縄貼付紋土器の変遷観（「Ⅰ群」→「Ⅱ群」）を間接に否定しているが、それは果たして妥当であろうか。
- (2) 「Ⅰ群以前」の年代想定（8～9世紀代）には「蕨手刀」も利用していると推察される。そのとおりならば、「Ⅱ・Ⅲ群」に副葬された「蕨手刀」（柳澤2012d：177-182）については、200～300年に及ぶ伝世を認めることになろう。それについての記述や論証が省かれているのは何故であろうか。
- (3) 河野が詳述したウトロチャシコツ下遺跡における「トビニタイ土器群Ⅱ→ソーメン紋土器（「Ⅲ群」）の層序（河野1955・1958）を棚上げとし、トビニタイ遺跡の層序（「Ⅰ群」→トビニタイ土器群Ⅱ）

を一方的に重視するのは何故なのであろうか。どちらも同じ重複堅穴の層位的な出土事例である。

- (4) 「Ⅲ群」から「トビニタイ土器群Ⅱ」、そして「トビニタイ土器群Ⅰ」への変遷を妥当とする、型式学的な検証が省かれている。
- (5) また、河野の「型」別編年案（河野1955・1958）の有効性を、どのような理由で否定し（柳澤1999b：52-55）、「第2類」を細分した新編年案を提示するに至ったのか。
- (6) トビニタイ土器群Ⅱ（27：元町遺跡堅穴）と捺紋Ⅳ（8）を併行関係にあると認め、それと捺紋Ⅲ（9：元町遺跡堅穴）を同時代と捉えている。しかし、それは妥当な見方であろうか。因みに捺紋Ⅲ（4）は9・10世紀に比定されており、年代は明らかにズレている。
- (7) トビニタイ土器群Ⅰ・Ⅰ-Ⅱを14・15世紀代とする物証が提示されていない。
- (8) 名取武光が11世紀の初頭に比定した「遼時代の素焼土器」を「ソーマン紋土器」（「Ⅲ群」）に伴うと判断した根拠は、いったい何に基づいているのか。その点の説明はどこにも見当たらない。

以上のとおり「東大編年」は、提唱された1964年の時点で年代学上の様々な問題点と矛盾を抱えていたと考えられる。そして1970年代に入ると、また新たな混乱が始まることになる。

4) 『常呂』から「オホーツク文化の諸問題」シンポジウムへ

1964年には、「オホーツク文化」が11世紀代を以って終焉したとする「東大編年」と、11・12世紀の「中国の遺品」を伴うとした山内博士との間で、北方編年体系をめぐる学説は真向から対立する状況となった。そして、『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（下）』の新版に当たる。『常呂』が1972年に刊行されると、河野広道の「オホーツク式土器」編年案はあい呼応して等閑に付され、学史界へと一方的に退けられた。山内博士の学説も全く不成立とされ（大井1970a・b, 1972a・b, 菊池（徹）1972a）、新世代による新時代の幕開けとなる（柳澤1999b・2013b・cほか）。

なかでも菊池徹夫氏は、石附編年（石附1969）の疑問点を解消すべく、「東

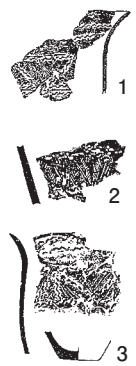

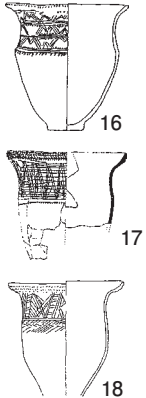

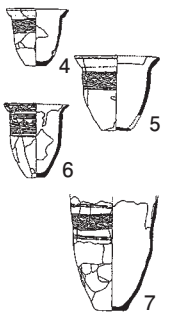
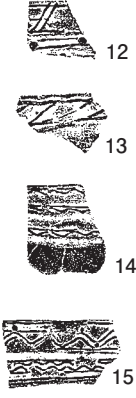
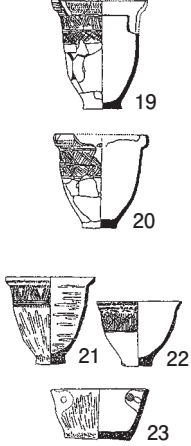
大編年」を独自に改訂した新編年（第4図）の提案を行った（菊池1972a：447-461）。氏の大きな貢献は、「トビニタイ土器群」の系統性を認めて細分を行ない、その序列を「Ⅰ（1～3）→Ⅱ（4～8）」と正しく捉えた点にある。これは「東大編年」における「Ⅱ→Ⅰ」（第3図27～30→32～34=35）の変遷観を、まさに逆転させる考案であった（柳澤1999b：94）。

さらに菊池氏は、「オホーツク式」の「Ⅱ・Ⅲ群」（藤本d・e群）を11～12世紀代に比定し、それらに並行する土器群として、トビニタイ土器群Ⅰ（1～3）とトビニタイ土器群Ⅱ（4～8）、擦文C～D（16～18）と擦文D～E（19～22=23）を挙げている。これは「東大編年」の骨格をほぼ全否定する考案であって、当時としては非常に大胆な編年構想であったと言えよう。

但し、「オホーツク式」擦文土器に先行して終焉を迎えたとし、河野説と「東大編年」の考え方をそのまま踏襲していることや、終末期として、「擦文F」段階の存在を想定していることが疑問点として挙げられる。また、「オホーツク文化」の衰退・終焉についても双方の考案を受け入れ、さらに要因を「本州および道南地方からの多量の文物の摂取」による「変質」に求め、年代に関しては「13世紀を前後する頃」と推定している（菊池（徹）1972a：459）。

ここで注意されるのは、この年代論に関連して大陸からの渡来文物についての言及、検討が見られないことである。これはもちろん、菊池氏が「遼・金代」（A.D. 946～1234年）の文物を棚上げにしたことを意味しない。トビニタイ土器群Ⅰ・Ⅱと擬縄貼付紋・ソーメン紋土器の年代を11～12世紀に比定していることが、何よりもその証左となろう。事実、1977年に開催された「オホーツク文化」のシンポジウムでは、通説のアイヌ文化成立史に対して強い疑問を表明し、「遼代土器」・「北宋銭」（景祐元宝：初鑄1034年・熙寧重宝：初鑄1073年）、青銅製の鈴・鐸、銚、軟玉などの渡来文物を積極的に取り上げている（菊池（徹）1977：9）。そして、他の研究者からの批判に答えつつ、自身の1972年編年案（第4図）の妥当性を改めて主張している。

以上のとおり菊池氏は、石附編年への疑問を手掛かりとして、「東大編年」の刷新を果敢に試みたと考えられる。しかしながら、その大幅な改訂作業によって、「東大編年」に係わる諸々の疑問点（柳澤2013b：58-76, 113-119）

	「トビニタイ土器群」	オホーツク式	捺文土器	渡来文物
11 ～ 12 世紀 ころ				
				
13 世紀 ころ			「F段階」	

第4図 菊池徹夫氏の編年観、年代観と渡来文物の対比（菊池（徹）1972a・1977より編成）

は、どれほど解消されたであろうか（柳澤2008a：2-5, 2013b：58-76・113-119, 2013c：117-121）。

以下、それに係わる論点を改めて示し、次に大陸系の渡来文物の研究史に移りたい。

- (1) 刻紋土器B（9）・擬縄貼付紋土器（10）・ソーメン紋土器（11）とトビニタイ土器群I（1～3）、擦紋II（16）・擦紋III（17）・擦紋IV（18）が並行すると捉えている。それを証明する考古学上の証拠は、1972年以前にも、それ以後にも存在しないのではないか。
- (2) これらの土器群の実年代は、筆者の編年案によると9～12世紀に及ぶと考えられる（柳澤2008c・2011b）。11世紀代に比定される「遼時代の素焼土器」（24）と北宋銭（25・26）、「オホーツク式土器」d群（9～11）の共伴事実は、いったいどの遺跡で確認されたのだろうか。

5) 菊池俊彦氏の編年観 その(1) 大陸文物と渡来系文物の新研究

『常呂』の刊行から4年後、「東大編年」と山内博士の「新北方編年」説の相克から12年後に、菊池俊彦氏の画期的な大陸文物と渡来系文物の総合研究が発表された（菊池（俊）1976, 第5図）。

まず注目されるのは、山内博士がオホーツク文化は「十一、十二世紀の中国の遺品を持つ」とした渡来文物の年代に関して、大陸・北海道島の通説編年を参照して「10～11世紀」代止まりとし、12世紀代を欠くとした点が挙げられる。しかし山内説との関わりは、本文・註ともに何も記述されていない。新旧の「北方編年」説（山内1939・1964）についても、特に言及はされていない。この点は、これまで見落とされているようであるが、注目すべき事実と言えよう^(註2)。

菊池氏の編年体系は図に示したとおり、大陸の「靺鞨文化」・「女真文化」と「オホーツク文化」の関係性について、広大な環オホーツク海域のフィールドを舞台にして、様々な文物の分析と比較を通じて詳しく検討されている。北方考古学史上に初めて実践された画期的な業績として、その続編（菊池（俊）2004）とともに高く評価されていることは、大方が認めるところ

		標 本 例	靺鞨文化		女真文化		オホーツク文化					
			4~5世紀	7~8世紀	10~11世紀	12~13世紀	櫛目文・縄目文	円形刺突文	刻文・爪形文	沈線文・貼付文	終末期	
土器	素焼土器	1~4			○							
石製品	軟玉製環状石	5~17	○	○	○		○		○			
	ガラス玉		○	○			○		○	○		
骨角器・骨製品	管玉		○	○					○			
	骨製小札	18~21		○								
鉄器・鉄製品	平柄・袋柄鉄斧	22・25・26				○			○			
	曲手刀子	23・27・28	○	○	○				○	○		
	刀子	24・29・30	○	○	○							
	直刀			○								
	鉾			○	○							
青銅・銀製品	小札		○	○	○	○						
	鉄鈴			○								
	鉸具		○	○	○				○			
	貨幣											
		北海道島	大陸									
土器		1				2	3	4				
石製品		5										12~14 15~17
骨角器・骨製品		18				19	20	21				
鉄器・鉄製品		22									23	24
青銅・銀製品		31										31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42

第5図 「オホーツク文化」に見られる「大陸系遺物」とその類例の年代、並びに標本例 (菊池 (俊) 1976・1995aより編成)

であろう。

そこで以下、「オホーツク文化」の年代観に焦点を絞り、氏の見解を検討してみたい。第5図の資料を一覧すると、重要な遺物は「鈴」を除いてすべて網羅されていることに気付く。それらの年代は、中国とロシアの新旧の研究成果を丹念に参照し、4～13世紀の範囲に限定している。但し大陸側の文物では、6世紀と9世紀代が何故か欠落している。北海道島の側では大井晴男の編年観（大井1970a・b, 1972a・bほか）を採用し、大陸系文物の年代に関しては、特に付表への記載を略している（菊池(俊)1976:86, 1995a)。また、「円形刺突文期」と「終末期」には渡来文物の実例が無いと指摘し、「刻文・爪形文期」には目立つが、「沈線文・貼付文期」には少ないとしている。

また、その「終末期」とは、「道北では礼文島元地遺跡の黒土層から出土した厚手の土器」であり、道東では「トビニタイ土器(まゝ)」（菊池(徹)1972a)に相当するとして、通説編年の序列にしたがった説明がなされている。

- (1) 刻文・爪形文期……………（7～8世紀：「靺鞨文化」）
- (2) 沈線文・貼付文期……………（10～11世紀：「女真文化」）
- (3) 終末期(厚手土器・トビニタイ土器) …（12～13世紀：「女真文化」）

ここに見える「貼付文期」は、「東大編年」（第3図21・22）や菊池編年（第4図10・11）と同様に、真正の擬縄貼付紋土器とソーメン紋土器の双方を含み、道北の沈線紋土器に並行すると捉えられている。このような編年観は、大井の編年観（大井1970a, 1972a・b, 1973）と本質的に変わらない。菊池氏自身は元地遺跡や香深井1(A)遺跡の調査に参加し、その整理と研究に従事している。したがって、大井編年の妥当性を早くから追認していると考えられる。そして、それを大前提として、大陸側の文物の研究に取り組んでいる点が注目される。

「オホーツク文化」年代を11世紀代止まりとし、同時に山内博士の「新北方編年」説を暗に否定する見解は、菊池氏の1976年論文に先行する「東大編年」（駒井編1964）において夙に提唱されていた（第3図参照）。したがって菊池氏の年代学上の業績は、1～32例に至る大陸系渡来文物の年代が11世紀代止まりであることを、東北アジア考古学の成果を網羅して詳細に検討

した点に求められよう。

それらの文物のうち11世紀代と特定し得るのは、「素焼土器」(1~4)と北宋銭(34・35・41・42)において他には存在しない。その点は先行研究の着眼点と特に変わらない。軟玉(5~17)や刀子類(23・24, 27~30)、耳飾り(32・37~39)などは、いずれも7~8世紀と10~11世紀の二者に比定されているが、今のところ年代を特定するのは難しい。但し、「遼・金代」に比定した駒井・原田の鑑定によれば、これらは10~11世紀代に属する可能性が高いと推定できるであろう。

先行研究との関係を以上のように捉えると、菊池氏による大陸系渡来文物の研究は、「東大編年」で示された旧き年代観(第3図)を追認する役割を果たしていると認められる。したがって、それと鋭く対立した山内の「新北方編年」説(山内1964)や佐藤達夫の論考(「擦紋土器の変遷について」:佐藤1972)などは、敢えて取りあげる必要はないと判断されたのであろう。そのように理解して菊池氏の編年案を見直すと、次のような疑問点が隠れていることに気づく。大井説によると、道東のトビニタイ土器群Ⅱに対して、道北では元地遺跡の「黒土層」土器群が同時代とされている(大井1972a・b, 1973)。この編年案について菊池氏は1976年以降、現在に至るまでその改訂の必要性を表明されていない。

したがって元地遺跡の「黒土層」から検出された「接触土器様式」(大井1972b)、すなわち「元地2式」(柳澤2012b・2013d)と擦紋Ⅲ(新)の「共伴」事実が改めて問題となる。後者が10世紀代に位置することは、道央におけB-Tm編年の成果から見て確実であると考えられる(柳澤2012d・e)。では先に触れた「終末期」、則ち黒土層の「元地式」(「接触様式」)の年代は、どのような根拠に基づいて「12~13世紀」に比定されたのであろうか。これは菊池氏の編年観と、その年代観に伏在する大きな疑問点であると言えよう。

次に「遼時代の素焼土器」(1)である。菊池氏は、名取がA.D. 1018年(11世紀代)に比定した1例の土器片を取り上げ、それに酷似する渤海国(A.D. 698~926年)の東京城上京龍泉府から出土した櫛目文土器片について、

「(同府は、) ほぼ8世紀中葉から10世紀前半にわたる都である。した

がって（その）西殿址から出土した櫛目文の土器はこの年代の範囲に相当する。」「この種の土器が必ずしも遼（A.D. 946年～）の文化に特有で、遼代に初めて出現したとはいきれない。あるいは10世紀以前の渤海文化期に出現していたかも知れない」


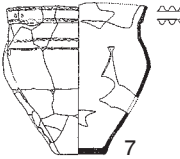



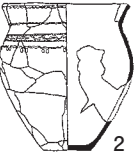
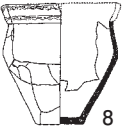

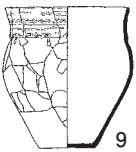
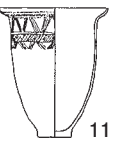

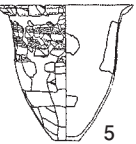
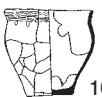

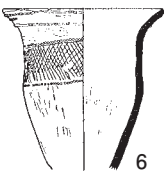

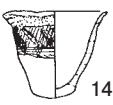
と述べている（菊池1976・1995a：80）。しかしながら、遼から搬入された西殿址土器の年代が、渤海国が滅亡したA.D. 926年よりも早く、果たして「9世紀代」まで遡ることがあるのであろうか（柳澤2013b：註1）。また、その出自を渤海文化それ自体に求める考古学上の根拠は、果たして実在するのであろうか。なお後節では、この二つの疑問点を具体的に解くことが大きな課題となる。

6) 宇田川洋氏の編年・年代観の変遷 その(1)

山内博士が1970年の8月に逝去され、『常呂』が1972年に刊行されると、「東大編年」の体系（駒井編1964）は、若い世代の研究者によって大きく書き換えられた。その一端は、すでに菊池徹夫氏の先進的な試みとして触れた。それから5年後、この新世代と対立しつつ、唯一山内説を継承していた佐藤達夫が逝去（1977年4月）すると、その半年後に「オホーツク文化の諸問題」と題したシンポジウムが札幌で開催された。これを契機として、本格的なポスト『常呂』時代の幕開けとなる^(註3)。

そして、このシンポジウムに呼応するように、北海道考古学の成果を手際よく体系化した『北海道の考古学（1）・（2）』が宇田川洋氏によって刊行された（宇田川1977）。その下巻では概説書でありながらも、「オホーツク」・擦文の両文化に係わる先学の業績が丁寧に整理されている（前掲112-120, 146-155, 166-170）。また、1970年代における宇田川氏の編年観と年代観（宇田川1971・1975）が標本例を用いて詳しく記述されており、学史的にも注目すべき内容になっている。残念ながら編年案が図式的に提示されていないため、これまでは見過ごされているようである。そこで筆者なりに整理すると、第6図のような模式図となる。

少し観察してみよう。「オホーツク式」のソーメン紋土器については藤本

	「ホーツク土器」・「トビニタイ式」	「オホーツク土器」	擦文土器	渡来文物
オ ホ ー ツ ク 期	 1	 7		 15  16  17
	 2	 8		
	 3	 9	 11	
	 4			12 世 紀
	 5	 10	 12	
	 6		 13	13 世 紀
			 14	

第6図 宇田川洋氏の編年案と渡来文物の対比 その(1) (宇田川1977より編成)

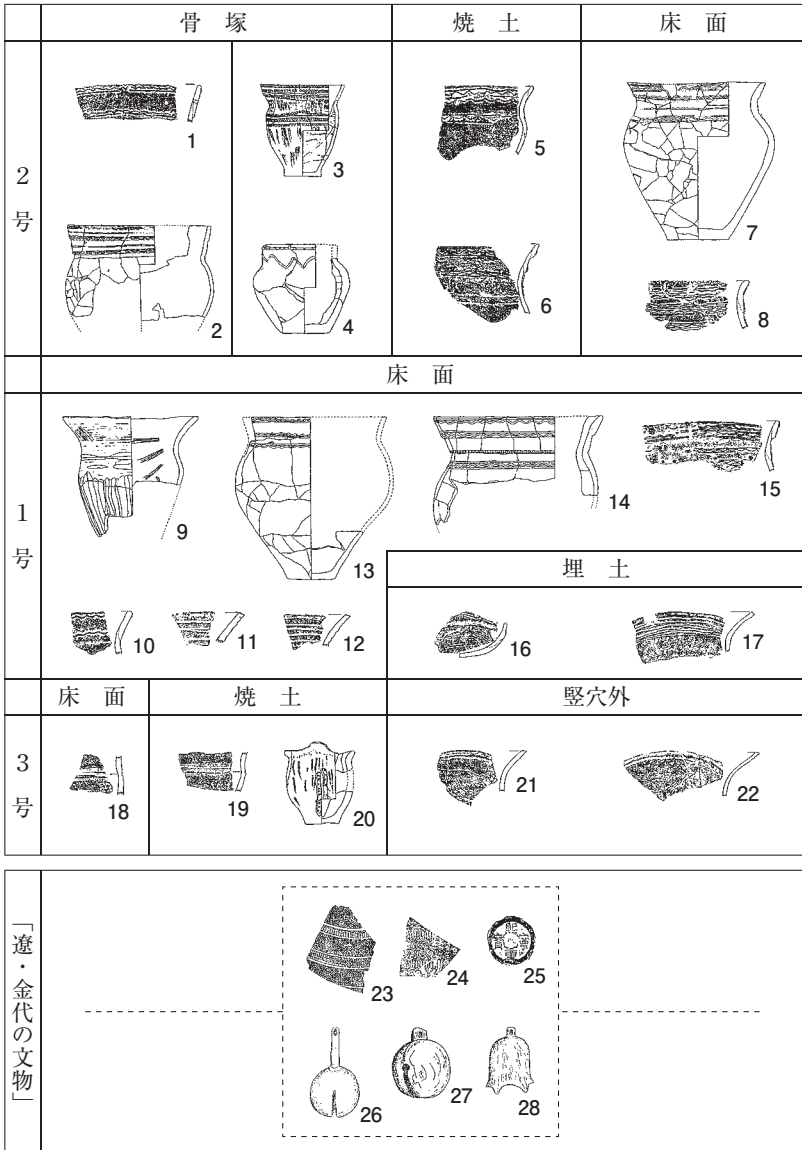
編年（藤本1966）をふまえて、トビニタイ遺跡1号・トコロチャシ遺跡2号堅穴を対比し、それに後続するトコロチャシ遺跡1号（内側）堅穴土器とトビニタイ土器群Ⅱが併行関係にあると認めている。その年代は11～12世紀に比定されるという。そして13世紀代にはソーメン紋土器が消滅し、トビニタイ土器群Ⅰがそれに後続すると述べている。

これは先に触れた菊池編年（菊池（徹）1972a）の「トビニタイ土器群Ⅰ→Ⅱ」の序列を逆転させた改訂案と言えるであろう。トビニタイ土器群Ⅱとソーメン紋土器（「藤本e群」：藤本1966）の対比は菊池編年と変わらない（第4図参照）。しかし擦紋土器との対比では、菊池氏の「擦文D・E」（11・12, 13・14）を12・13世紀代にずらし、後者をトビニタイ土器群Ⅰ（6）に並行すると認めている。このように宇田川氏の新しい編年観は、菊池編年をモデルとして暗にその改訂を試みたものと考えられる。また、ソーメン紋土器（「藤本d群」）を11世紀代に比定しているが、これは「東大編年」を踏襲した見方であり、その点は菊池編年と共通する。したがって11世紀代を示唆する15～17例の渡来文物は、1977年の時点でもオホーツク文化の終焉を捉えるための、最も有効な「鍵」資料と見做されていたと言えよう。

7) 『ニツ岩』の刊行に伴う新しい年代観

1970年代に入ると網走市や斜里町、標津町において、新世代による改訂「東大編年」案に対して変更を迫る発掘調査の成果が相次いで報告された。例えば、ニツ岩遺跡（野村・平川編1982）やピラガ丘遺跡群（米村、金盛1970～1976a）、須藤遺跡（金盛1981）、カリカリウス遺跡（相田・相田1982）などが挙げられる。ここでは、「オホーツク文化」の年代観を遡及させるうえで、決定的な役割を果たした、ニツ岩遺跡の出土事例に改めて注目したい（第7図、柳澤2003・2007aほか）。

発掘調査は1～3号の堅穴を対象として、1975年から4年に亘って実施された。いずれの堅穴においても、ソーメン紋土器に伴って様々な層準から土器器や変容土師器、又は在地系の擦紋Ⅱや続縄紋土器などが検出されている。そうした出土状況が、いかにも同時代性を示すように見えることから、俄かに「オホーツク文化」の終焉年代、例えば「東大編年」の11世紀代説



第7図 ニツ岩遺跡1～3号豎穴の出土土器群と渡来文物

（第3図参照）について、重大な疑義が生じることとなった。

報告書によると、続縄紋土器を除くこれらの遺物は「共伴」関係にあるとされ、ほぼ同時代の所産と見做されている（野村・平川編1982）。その根拠は、2号竪穴の骨塚におけるソーメン紋土器（1・2）・擦紋Ⅱ（3）の伴出、1号床面上でのソーメン紋土器（13～15）・土師器（9）・変容土師器（11・12）の出土状況などに求められている。他方、骨塚や焼土の内部から、なぜ小型完形品の擬縄貼付紋土器（4）や続縄紋土器が伴出したのか。また、土師器や「擦紋前期」土器と擦紋Ⅱには、なぜ年代差が認められるのか。さらにソーメン紋土器には、なぜそれらの影響が全く認められないのか。そうした素朴な疑問点（柳澤2003・2007aほか）は、不思議なことに今なお不問扱いされたままである。現在「オホーツク文化」の終焉年代は、8～9世紀代説（東京大学系）と9世紀代説（北海道開拓記念館・北海道埋蔵文化財センター系）の二者に分かれているが、その妥当性に関する議論もまた、なぜか等閑に付されている^{（註4）}。

さて論点を戻すと、「遼・金代」に比定された大陸系の渡来文物は、『二ツ岩』の報告ではどのように扱われているであろうか。11世紀代を示唆する「遼時代の素焼土器」（23）や北宋銭（25）、副葬品の鈴（26）などは、「オホーツク文化」の8・9世紀代終焉説とは全く相容れない。この点は、誰でも容易に気づく事であろう。だが不思議なことに報告書には、大陸系の渡来文物への言及は見当たらない。これは二ツ岩遺跡の明白な「共伴」事実が、ピラガ丘遺跡群の調査成果と整合し、さらに蕨手刀の年代観によっても強力に支持されるから確実である、という見方を反映していると推測される^{（註5）}。しかし、本州島から渡来した蕨手刀が示唆する年代は、大陸側の文物からも、つまり双方向的に、その妥当性が検証されて然るべきであろう。

8）宇田川洋氏の編年観・年代観の変遷 その（2）

佐藤達夫の逝去（1977年4月）後に発表された宇田川氏の旧編年観（宇田川1977年11月）は、「東大編年」（駒井編1964）と「菊池編年」（菊池（徹）1972a）を独自に改編するものであった。ソーメン紋土器やトビニタイ土器群Ⅱの年代を「12世紀」代とする氏の新年代観は、二ツ岩遺跡（1982）・カ

リカリウス遺跡の報告書(1982)が同時に刊行され、その影響が浸透する中で大きく変貌を遂げる(第8図)。その詳細については旧稿に譲り(柳澤2004a:149-153・2005a)、ここでの再論は控えたい。

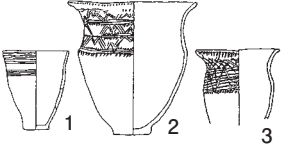
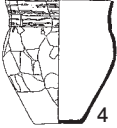


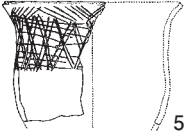
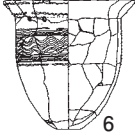




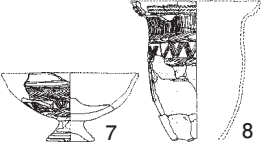
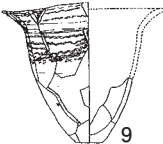



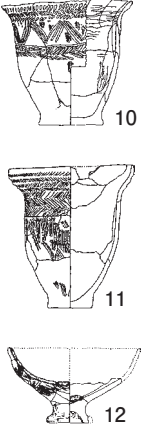
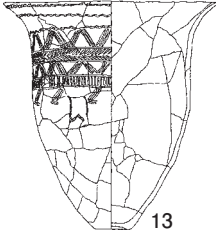
宇田川氏の新しい編年案は、『アイヌ文化成立史』(宇田川1988)の中で簡略に記述されており、内容的には不明な点がある。旧編年案(宇田川1977)と比べると(第6図参照)、次のような点で改訂されている(()・ゴシック文字:筆者)。

- (1) オホーツク文化の終焉、すなわちソーメン紋土器(藤本e群・東大編年の「Ⅲ群」)の年代は12世紀代ではなく、ニツ岩遺跡やカリカリウス遺跡の調査成果(1982)によると、トビニタイ土器群Ⅱの年代(10世紀頃)から見て、9世紀以前と推定される(1~3=4)。
- (2) ピラガ丘遺跡群の調査成果(金盛1976a)に基づき、また大井晴男の編年観を参照すると(大井1970a)、トビニタイ土器群Ⅱ(6)は「藤本e群」(4)ではなく、東大編年の第2(5)、すなわち擦紋Ⅲに並行すると認められる。
- (3) トビニタイ土器群の序列は、菊池説(菊池(徹)1972a)の「Ⅰ→Ⅱ」とは逆転し、「Ⅱ」→「中間的なもの」(9)→「トビニタイ土器群Ⅰ」(13)の順に変遷する。それぞれは菊池編年のD(7・8)とE(10~12)に並行し、「11~12世紀」と「13世紀ころ」に比定される。

このようにオホーツク文化の終焉年代や擦紋文化との対比には、旧編年観に比べると大幅な修正が加えられた。これは「東大編年」の終焉を告げる大改訂であったと言えよう。その内容を一覧すると、『北海道の考古学(2)』(宇田川1977)で重視した大陸系の渡来文物(14~19→18・19, 21~23)が全く姿を消していることに気付く。11世紀代を示唆するとした渡来文物(21~23)は、「擦文後期」とトビニタイ土器群Ⅰ-Ⅱに対比され、その結果、「オホーツク文化」との関わりは否定された。また年代幅のある鐸や鈴などは、10世紀代かそれ以前に位置づけを変更したと推測される。

以上の大改訂に際して、宇田川氏は大陸側と北海道島における文物の年代

道東における「オホーツク文化」年代観の改訂（前篇）

	擦文系	オホーツク系		渡来文物
前期			「9世紀ころ」	 14  15 16
中期			10世紀ころ	 17  18  19  20
後期			11～12世紀ころ	 21  22  23
晩期			13世紀ころ	

第8図 宇田川洋氏の編年案と渡来文物の対比 その(2)(宇田川1977・1988より編成)

検証を、果たして双方向的に済ませているのであろうか。その点は今日、改めて問われるべき論点となろう。

9) 菊池俊彦氏の編年観 その(2)「オホーツク文化」年代観の変更

1976年の時点で菊池俊彦氏は、オホーツク文化の「沈線文・貼付文期」の年代を「10~11世紀」に比定していた(第5図参照)。それから17年後に提示した新編年図表(第9図, 菊池1993)では、「刻文・爪形文期」(1・2)は「7~8世紀」代で変わらないが、それ以降は大きく改訂されている。また、土器群の単位が時代区分の呼称(「確立期・変容期・融合期」)に置き換えられたことも、大きな変化として注目される(ゴシック文字・下

		サハリン南部	北海道北部	北海道東部・南千島	渡来文物	
7 ~ 8 世紀	確立期	江の浦式 →			7世紀	
		1 (香深井A)	2 (モヨロ貝塚)		8世紀	
9 ~ 10 世紀	変容期	3 (南貝塚)	4 (オンコロマナイ貝塚)	5 (トコロチャシ)	9世紀	
					10 ~ 11 世紀	8 9 10 11 12 13
11 ~ 12 ・ 13 世紀	(融合期)	東タライカ式			12世紀	
		6 (元地)	7 (トビニタイ)		13世紀	

第9図 「オホーツク文化の土器の主要時期区分」(菊池1993を抄録・改編) と渡来文物の対比

線：筆者）。

(1) 「沈線文・貼付文期」(4・5 = 南貝塚式：3) の年代変更 (「10～11世紀」代→「9～10世紀」代)

(2) 「終末期」の年代変更 (「12～13世紀」代→「11～12・13世紀」代)

ここでは特に、サハリン島の南貝塚式(3：伊東1942)と道北の刻紋・沈線紋土器(4)、道東のソーメン紋土器の年代を、各々に1世紀遡らせた理由は説明されていない。また別の論考を参照しても、その点は確認できない。一つ考えられることは、菊池氏が二ツ岩遺跡の報告書で示された所見(野村・平川編1982)のとおり、土師器・擦紋Ⅱとソーメン紋土器を「共伴」関係にあると認め、オホーツク文化の終焉年代を遡らせる措置をとった可能性である。

そのとおりならば、「10～11世紀」代と認めていた「遼代土器」(11)や北宋銭(12・13)の評価は、どのような理由で変更されたのであろうか。宇田川氏の「新編年案」(宇田川1988)と同様に、後続する擦紋土器(「後期」)に対比したのであろうか。その場合は、これらの大陸系の渡来文物が「オホーツク文化」に伴うという年来の所見を撤回したことになるであろう。

次に融合期(旧「終末期」)とされた時期である。この時期は300年間ほど継続したとされる。しかし、それを根拠づける大陸・本州系の文物はこれまでのところ発見されていない。元地遺跡(黒土層)の6例に「共伴」したのは擦紋Ⅲ(新)であって、これは10世紀代の後半に比定される。他方、擦紋Ⅲ(新)に対比された7例のトビニタイ土器群Ⅱは、筆者の編年案では12世紀代まで降り、5例の時期に接近すると考えられる(柳澤2008c・2011b)。

以上のとおり「新編年案」では、大陸から渡来した文物の一部が「融合期」に対比されるとしている。したがって菊池俊彦氏の旧編年案は、『二ツ岩』(1982年刊)以降の通説編年に同調して大きく改訂されたと理解して良いであろう。しかし、その年代操作の妥当性は、大陸側と北海道側の双方において、いったいどのように検証されたのであろうか。その点は、先の宇田川氏の改訂編年案の場合と同様に良く分からない^(註6)。

10) 北海道開拓記念館の「大陸系遺物」編年

ニツ岩遺跡の発掘調査を主導した野村崇氏に代わって、1990年代以降は右代啓視氏が北海道開拓記念館先史部門の担当者となる。宇田川氏が「東大編年」から『ニツ岩』等に依拠した新編年観（野村・平川編1982、金盛・楳田1984）への移行を表明した後（宇田川1988）、「オホーツク文化」の9世紀代終焉説の体系は右代啓視氏によって精力的に整えられた（右代1991・1993・1995）。それ以降、これが通説編年として広く支持されるようになる^(註7)。同館の展示解説書や特別展の図録に見える記述は、1991年前後の同館内における検討など（右代・平川ほか1995）をふまえて、新たに執筆されたと考えられる（右代1999・2003）。それはある意味で、宇田川氏の新編年案（第8図）を年代論と空間論上の観点から精密化する試みであったと言える。

右代氏の1991年論文で特に重視されたのは、遺物の「共伴」関係や¹⁴C年代や火山灰、蕨手刀などである。大陸に由来する文物の交差検証に関しては、今後の課題として検討が保留されている。以下は氏の年代観の要点である（[]：筆者挿入）。

- (1) オホーツク文化のⅠ・Ⅱ期は5～9世紀、トビニタイ文化は9世紀末からほぼ12世紀、ということが可能である（右代1991：43）。
- (2) オホーツク文化の後期では、貼付文土器〔擬縄貼付紋・ソーメン紋土器〕が成立する。この時期は、「末期古墳文化や擦文文化との接触〔ニツ岩遺跡〕、8世紀を中心に靺鞨文化や渤海国との接触（交易）などがあげられる。このことは、モヨロ貝塚、目梨泊遺跡などから靺鞨・渤海系・本州系の金属製品が8世紀を中心に出土することから裏付けられる。」（右代1995：57 ↔ 右代・平川ほか1995）。

宇田川氏や菊池氏の新編年案（宇田川1988、菊池（俊）1993）では、大陸系の渡来文物の年代の捉え方を、どのような根拠から変更しているのか、その点に関しての明瞭な説明が省かれていた。それに対して右代氏の編年観では、菊池氏が「10～11世紀」代に比定していた「貼付文土器」に対して、8世紀を中心とした年代を想定している^(註8)。

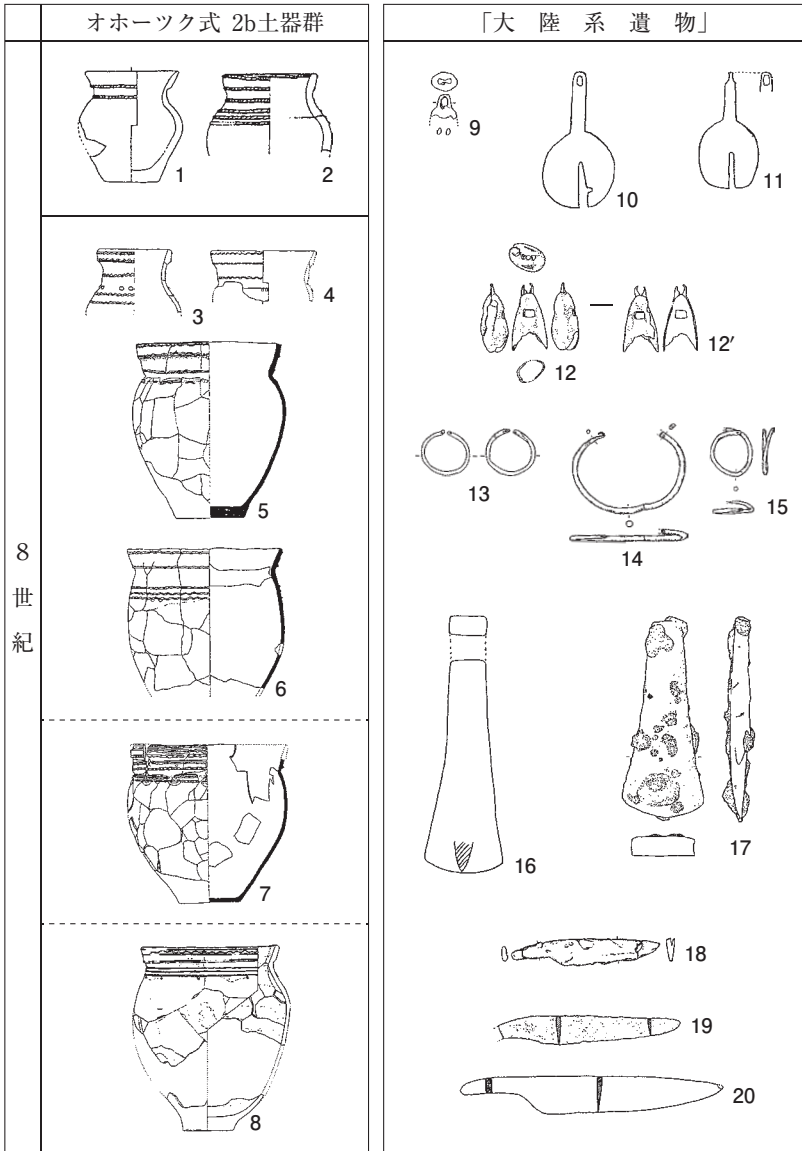
8世紀代という年代は、菊池俊彦氏の旧編年案（第5図）では「刻文・爪形文期」に比定されているから、この所見に関しても右代氏は、何らかの根拠に基づいて全くの異説を述べていると考えられる。つまり、¹⁴C年代と蕨手刀の推定年代を駆使した右代氏の編年観（右代1991・1993）は、宇田川氏の新編年案（宇田川1988）を精密化するとともに、菊池氏による大陸系文物の年代論の修正を意図したものであった、と理解されるのである。

そうした事情については、これまで特に注意が払われていないが、その後に発表された共同作業による「大陸系遺物」の年代研究からも、明瞭に窺うことができるであろう（右代・平川ほか1995）。これは北海道開拓記念館で推進されたプロジェクトとして、多くの同僚とともに纏められた。

北海道島で発見された「大陸系遺物」を網羅的に集成し、それらの帰属時期について、初めて組織的な調査が実施されたわけである。時宜にかなった企画であったと言えよう。個々の文物に伴出した土器群の時期比定については、まず菊池俊彦氏と異なる右代氏の編年案（右代1991・1993）を採用している。菊池氏と最も異なる点は、「沈線文・貼付文期」を「沈線・刻文系」と「貼付文系」に2細分したことである。その結果として、道北と道東の精確な編年対比が、例えば大井編年に比べてどのように変化しているのか、その点は気に掛るところであるが、今も詳らかでない。

他方、「貼付文系」は正しく独立的に扱われた。しかし第10図を参照すると、右代編年では、擬縄貼付紋土器（1・2）とソーメン紋土器（3～8）を一括扱いとしている。したがって、この型式観から見る限り、大井晴男の編年観に由来する道東・道北の「地域差（地方差）」編年説の誤謬は、先に引用した「展示解説書」の概説（右代1995）と「大陸系遺物」の年代論的な研究（右代・平川ほか1995）を検討していた時点でも、全く克服されていなかったと言えるであろう。

さて後者の研究では、大陸からの渡来文物として、鐸や鈴（9・12, 10・11）、耳環（13～15）、平柄鉄斧（16・17）、曲手刀子（18～20）などが図示されている。これらに伴出（「共伴」認定）した土器群は、資料の網羅的な収集とその精査に基づいて、第11表のように整理された。一見して、「刻文系」（刻紋土器A）や「沈線・刻文系」（刻紋・沈線紋土器）の時期には、「大



第10図 右代啓視氏の編年案(右代1991)と「貼付文系土器との対応が明らかな遺物」(右代・平川ほか1995)の対比

陸系遺物」に乏しいことが分かる。それに對し、「貼付文系」になると急激に増加する様子が示されており、この時期には、帯飾を除くとすべての文物の存在が認められると言う。

これは菊池俊彦氏の分析と較べると、果たして同様の結果を示していると認められるであろうか。そこで項目を並べ替え、両者のデータを比べてみたい（第12表）。この表では先に述べたとおり、菊池氏の「沈線・貼付文期」（「10～11世紀」代に比定）を2細分し、「沈線・刻文系」と「貼付文系」を新設している。したがって○・◎印の位置は自ずと重なるはずである。もちろん、新資料についてはその限りで無い。

しかし、時期が判明したとされる資料は、少なくとも7～8倍以上に増えており、しかも、その大半が「貼付文系」に帰属する資料で占められている。右代氏の編年観では、「貼付文系」は8～9世紀代に跨るとされている。菊池俊彦氏によって北海道島の「10～11世紀」代のオホーツク文化に伴うとされた同じ文物が、どのような根拠から8～9世紀の「靺鞨・渤海国」時代に対比されたのであろうか。

また、右代・菊池両氏の編年案に見える200年に及ぶ年代の齟齬は、いったい何を意味しているのであろうか。「東大編年」と山内博士の「新北方編年」説が相克（柳澤2013b）していた1964年の時点から見ると、余りに懸け離れた編年観、年代観へ移行してしまったと言えるであろう^(註9)。

このように、一枚岩のように見える通説の編年案には、以上のとおり年代観と文物対比に著しい齟齬が認められる。そして、この大方に認知されていない混乱した状況は、その後さらに度合いを深めることになる。

第11表 「土器との対応があきらかな遺物」（右代・平川ほか1995）

	凹形刺突文系	刻文系	沈線・刻文系	貼付文系
帯飾				?
鈴				◎
鐸				◎
金属製耳飾			○	◎
銚		○		○
曲手刀				○
曲手刀子		◎	◎	◎
平柄形鉄斧			○	◎
軟玉製環飾		○		◎
ガラス玉		◎		◎
コハク玉			○	◎

○ 1点だけ
◎ 2点以上

第12表 「大陸系遺物」に関する年代比定の対比 (菊池1976・1995a, 右代・平川ほか1995より編成)

		靴鞆文化			女真文化		オホーツク文化		オホーツク土器	
		7～8世紀	10～11世紀	12～13世紀	刻文・爪形文期	沈線文・貼付文期	沈線・刻文系	貼付文系		
土器	素焼土器		○							
石製品	軟玉製環状石玉 ガラ ス 玉 管	○ ○ ○	○		○ ○ ○	○			◎ ◎	
骨角製品・骨製品	骨製小鉢 骨製小札	○ ○								
鉄器・鉄製品	平柄・袋柄鉄斧 曲手刀 刀子 刀子 直 鋸	○ ○ ○ ○ ○	○ ○	○	○ ○	○		○ ◎	◎ ◎	
	小鉄鉸 鉄鉸具	○ ○ ○	○	○	○			○ ◎		
青銅・銀製品	帯飾り 耳飾り 貨 幣	○ ○ ○	○ ○ ○	○ ○		○		○	? ◎ ◎	

11) 白杵勲氏の「大陸製品」論と北海道島における編年観・年代観

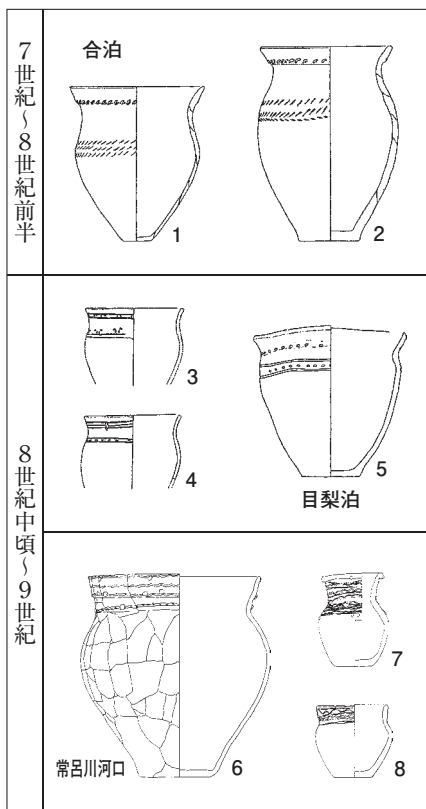
2000年代の代表的な研究事例として、右代氏の編年案(右代1991・1993・1995)を下敷きとした、白杵勲氏の編年観(白杵2004a～d・2007・2010a)を取り上げたい。氏のフィールドは大陸と北海道島を一望する広大な広さを有しており、北東アジアの考古学界では、菊池俊彦氏に続く世代を代表する研究者の一人と認められよう。

北海道島の編年に関しては、典型的な標本例を示して簡潔に説明する手法が採られている。したがって右代氏の編年観のように、立案の根拠や内容を詳細に知ることは難しい。前掲した論考をもとに、北海道島編年の大要と大陸文物に関する見解を対比すると、第11図のような図表になる^(註10)。

一見して、右代氏の編年観を援用していることが、標本例の配列や年代比定から読み取れるであろう。「刻文系」（1・2）と「貼付文系」（6～8）では、どちらも道東の標本例が採用されている。その中間期の「沈線・刻文系」を代表する資料としては、道北の目梨泊遺跡の資料（3～5）が用いられている。これは偶然ではあるまい。

「貼付文系」の中に擬縄貼付紋土器を内包させる右代氏の編年案に対して、目梨泊遺跡で提案された編年案（佐藤1994：125-172）を参照し、「沈線・刻文系」には擬縄貼付紋土器が伴う、つまり同時代であるとする編年観を採用している、と推察される。そのとおりであれば臼杵氏の編年案は、7～8世紀前半の道東と道北は刻紋土器が盛行しており、8世紀以降になると道東では擬縄貼付紋土器、道北の島嶼域では刻紋・沈線紋土器の世界となる。そして中間の目梨泊遺跡では両者が接触・交流していた、つまり「地域差（地方差）」編年の立場で捉えていることになる。

このような編年観に立脚した場合、『二ツ岩』の調査成果をふまえると、9世紀代とされた道東のソーメン紋土器は、道北のいかなる土器群に並行すると考えるのか。おそらく3～5例よりも新しい、沈線文土器（元地遺跡の魚骨層Ⅰ）と対比するのであろう。そうすれば、元地遺跡の黒土層から



第11図 臼杵勲氏の「オホーツク式土器」編年観と大陸製品年代の対比（臼杵2007・2010より編成）

出土した「元地式」(熊木2000a)と擦紋Ⅲの「共伴」事実に基づいて、10世紀代における「オホーツク式」系土器の変遷を広域的に矛盾なく捉えられる。

白杵氏の簡略・明瞭な標本例の提示を以上のように理解すると、この編年観が実は右代編年(右代1991~1995)の問題点を解消する操作から、巧みに編成されていることに気づくであろう。その点をふまえて、大陸系の渡来文物に関する所見に移ると、「刻文土器」の時期には、交易活動に伴う金属器の波及が想定されている。ところが「沈線文土器」期から「貼付文期」(ソーマン紋土器:8世紀中頃~9世紀)の後半には「北回りの交流も縮小した」、「ほとんど大陸製品というのとはなくなっていく」、という見解を被瀝している(白杵2004a・2004b:12)。

しかしながら、網羅的な資料集成と「共伴」土器を特定する作業のもとに、「大陸系遺物」の帰属年代を検討した北海道開拓記念館の分析では、白杵氏の言う「貼付文系」の時期(8世紀中頃~9世紀)における急激な増加を認めていた(右代・平川ほか1995)。この両者に見える著しい見解の相違は、いったい何に由来するのであろうか。

また、「オホーツク文化」の終焉を9世紀代に比定した場合、11世紀代を示唆する「オホーツク文化」に伴う大陸系の渡来文物の帰属について、どのように捉えるかも大きな問題である。その点は宇田川・右代両氏と同様に、白杵氏の場合にも明解な説明はされていない^(註11)。それは、どのような理由に由来するのであろうか。

こうした疑問点に留意すると、一枚岩に見える2000年代の通説編年にも、実は根本的な疑問点が北海道島と大陸側の双方のフィールドに伏在していることが、自ずと了解されるであろう。この隠れた疑問点を見直す作業は、その後どのように行われているであろうか。それは言い換えると、「東大編年」に基づく「オホーツク式土器」の「11世紀代」終焉説を、環オホーツク海域編年の観点から再点検する作業となるはずである(柳澤2008c・2011b)。

12) 宇田川洋氏の編年観・年代観の変遷 その(3)

北東アジア考古学の立場から見た白杵氏の一連の発言(白杵2007・2010)

と前後して、知床半島における研究成果を網羅的に整理した概説書、『知床の考古』（斜里町教育委員会刊，2008年）が刊行された。宇田川洋氏は2編の論考を寄せている。その第一は、総論として知床考古学の概要を述べたものである（宇田川2008a）。これには氏の長年に亘る北方考古学の研究成果を纏めた文化編年表が併載されている（第13表）。第二は、「擦文・オホーツク・トビニタイ文化」と題する論考である（宇田川2008b）。短編ながら両者を比較すると、注目すべき問題点が伏在していることに気づく。

先ず第13表から観察してみよう。対象とされた地域は実に広大である。広義の環オホーツク海域を視野に収め、北東アジアを含む中国、サハリン島、北海道島（知床：道東）と日本（本州島）を配列し、100年単位の日盛を付して各地域の諸文化の変遷とその並行関係を示している。

北海道島の編年案を暦年代の対比（横軸ライン）をもとにして辿ると、サハリン島の「オホーツク文化」（A.D. 420～1150年頃）に並行する「オホーツク文化」（おそらく南部域に分布する：A.D. 581/592～1050年頃）が道東部に波及する状況が表されている。その変遷の途中、奈良時代の初頭前後（A.D. 784～800年頃）に渡来した「オホーツク文化」は急激に衰退・変容し（純系「オホーツク文化」の終焉）、「トビニタイ文化」へ移行するとされる。その後「トビニタイ文化」は、「擦文文化」（A.D. 618～1300年頃）と並行的に変遷を重ねて「アイヌ時代」の「原アイヌ文化」（A.D. 1300～1868年）の母体となる。おそらく宇田川氏は、このように先に検討した新編年案（宇田川1988：第8図）を再び大きく改訂していると考えられる。以下、これを仮に「新々編年案」（宇田川2008a）と呼びたい。

本文の記述を参照すると（「 」・（ ）・傍点・下線：筆者補記）、

- (1) サハリンでは「オホーツク文化」が形成される。（これは）「オホーツク式土器」と呼んでいる土器群で代表される文化である。
- (2) （この）土器群には、「刺突文系→刻文系→沈線文系→貼付文系」という（一系的な）流れが（あり）、
- (3) 5世紀ころに北海道に南下し、後半の貼付文系土器群（「通称ソーマン文といわれる」）は北海道で独自に考え出された文様で、10世紀ころまで続く（宇田川2008a：19）。

第13表 「知床と周辺地域の文化編年」(宇田川2008a)

年代	中国	(ウヘサン)	北海道 (知床の代表遺跡)	日本(本邦)	大分県
20,000					
10,000					
8,000					
7,000					
6,000					
5,000					
4,000					
3,000					
2,000					
1,000					
0					
100					
200					
300					
400					
500					
600					
700					
800					
900					
1,000					
1,100					
1,200					
1,300					
1,400					
1,500					
1,600					
1,700					
1,800					
1,900					
2,000					

S: 濠文文化、O: オホーツク文化、T: トビニタイ文化、C: チャン

まず、「ソーメン文」の土器が「10世紀ころ」まで続くという年代観は果たして妥当であろうか。トビニタイ土器群Ⅱの貼付紋を「ソーメン文」と呼ぶならば、この記述は通説に拠る限りそれなりに理解できる。

しかしながら第13表を見ると、北海道（知床）に渡来した「オホーツク文化」は、明らかにA.D. 1050年頃、すなわち11世紀の中葉まで存続すると図解されている。この違いは何を意味するのであろうか。純系の「オホーツク文化」は8世紀ないし9世紀に衰退・消滅するのではなく、11世紀の中頃までは存続し、それが奈良朝の初頭前後に成立した「トビニタイ文化」と並行的な変遷を重ねる。図示されたラインを読みとる限り、宇田川氏はそのように想定していると考えられる。

そこで、もう一つの論考を参照したい（宇田川2008b）。先に紹介したように、これは「擦文・オホーツク・トビニタイ文化」の関係を論じたものである。年代観については、以下のように記述されている（（ ）・下線・ゴシック・傍点・下線：筆者）。

- (1) 5～10世紀のオホーツク文化はサハリンから南下してきた文化で、北海道で主にオホーツク海沿岸部に広がり、（その）後半期には北海道独自の土器群を確立した（160頁）。
- (2) 9～12世紀ころのオホーツク文化系のトビニタイ文化は（中略）擦文文化とオホーツク文化が接触した文化である（160頁）。
- (3) （トビニタイ式土器は）貼付文だけのトビニタイⅡ式と、刻線文が主体で貼付文が残るトビニタイⅠ式に分かれる。（中略）Ⅱ式は9世紀ころ、Ⅰ式は12世紀ころとしてよいであろう（165頁）。

こうした年代観が、『アイヌ文化成立史』（1988）の新編年案とかなり異なることは直ぐに気付くであろう。年代は一概に一世紀、100年ほど古く変更されている。この操作の理由や根拠は特に説明されていない。おそらくトコロチャシ跡遺跡（オホーツク地点）における、「擦文前期」土器とソーメン文土器の「共伴」事例の新発見（塚本2010・2012）に留意して、「オホーツク文化」の終焉年代を8世紀代に遡及させたと推察される（「新々編年案」の編成）。

さて論点を戻すと、トビニタイⅡ式の年代は9世紀とされているが、編

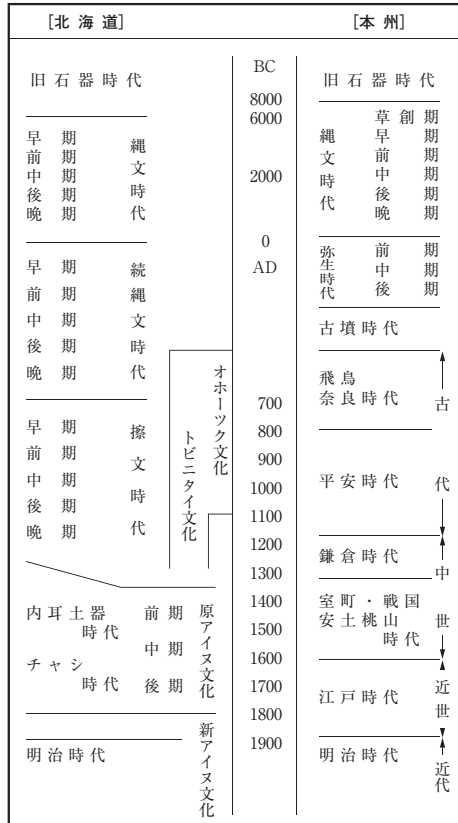
年表には「オホーツク文化」が飛鳥時代(A.D. 592年以降)頃から平安時代の1050年頃まで存続すると記載されている。このズレは、どのように解釈すれば良いのであろうか。そこで5年前に発表された編年案(第14表)を参照したい。

「オホーツク文化」はやはり飛鳥時代頃から始まり、A.D. 1100年まで、すなわち11世紀代まで存続している。他方、「トビニタイ文化」はA.D. 800ないし900年の頃に分岐して、13ないし14世紀頃まで存続するとされている。こうした年代観は、先の新編年案(第8図: 宇田川1988)と変わらない事が注意される。本文の解説では、右代氏の論考(右代1991・1993)が専ら引用

されているが、9世紀から11世紀に及ぶ「オホーツク文化」がいったい何を指しているのか、その点は良く分からない。

「オホーツク文化」の終焉を11世紀代と捉えるのであれば、それは旧き「東大編年」を先祖返りさせ、「遼時代の素焼土器」や「北宋銭(熙寧重宝: 初鑄A.D. 1078年)」などの渡来文物を暗黙の裡に重視していることになろう。そうではないとすれば、それらは8世紀ないし9世紀に終焉した「オホーツク文化」に伴うと考えていることになろう。そのようなキメラ的な年代観

第14表 「考古学の時代区分(北の文化と中の文化)」(宇田川2002)



を、宇田川氏は果たして想定しているのであろうか^(註12)。これまでに発表された論考から、こうした疑問点を解くことはかなり難しいように思われる。

さて、ここで通説の研究史を離れ、次に学史界に「忘失」された山内博士の「新北方編年」説（山内1964）の成り立ちについて、改めて考察したい（柳澤2013b）。

2. 「遼時代の素焼土器」の発表から山内博士の「新北方編年」説へ

1) 『モヨロ遺跡と考古学』（名取1948c）と発掘調査の成果

昭和22年から23年（1947～1948）にかけて、登呂遺跡の発掘調査に続いて、我が国の北辺において画期的なモヨロ貝塚の発掘調査が実施された。その結果、考古学・人類学の両分野に亘って、今日なお価値ある学術上の貴重な成果が獲得されたことは、広く人口に膾炙されている。

この発掘の様子は熱心に報道され、その成果には多大の関心が寄せられた。また、それに呼応するように、一般向けの啓蒙的な概説書や論説、記事などが次々に発表され、北海道内は考古学ブームに沸いたと言われる（第12・13図）。

ここに取り上げる名取武光の著書は、児玉作左衛門の『モヨロ貝塚』（北海道原始文化研究会出版部、1948年4月）に続いて、ほぼ半年後の11月に刊行された。A5版、214頁の小冊子であるが、随所に豊富な図を挿入し、モヨロ貝塚の最新の調査成果を取り入れた入門書として、丁寧に纏められている。

後述するように、本文中の図には資料的に価値の高いものが含まれており、貴重な情報源となっている。また巻末には、昭和16年度（「遼時代の素焼土器」）と昭和23年度（堅穴）の調査所見が付篇として収録されている（名取1948b：207-214）。特に前者の存在は、1980年代以降になると全く「忘失」扱いられているが、果たしてそれで良いのであろうか。



第12図 名取武光著『モヨロ遺跡と考古学—私たちの研究—』(表紙)



第13図 児玉作左衛門著『モヨロ貝塚』(表紙)

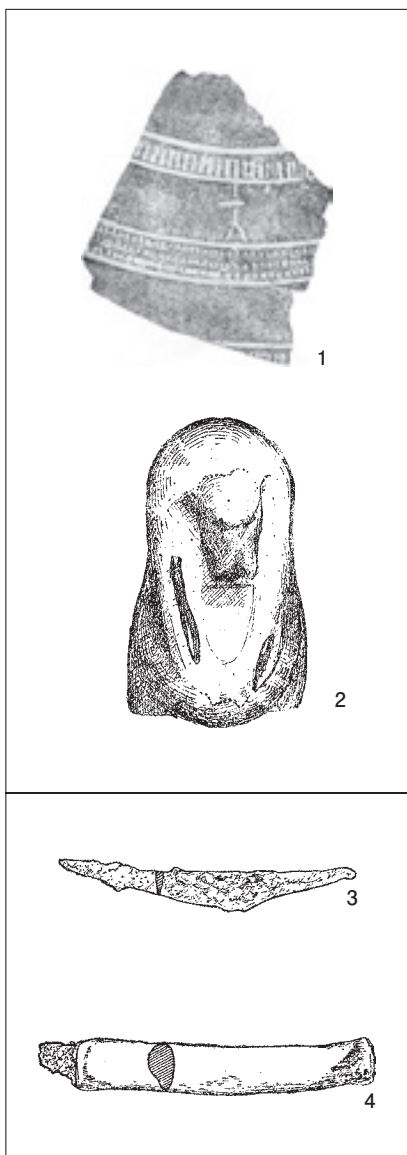
2) 「遼時代の素焼土器」についての所見

「遼時代の素焼土器」に関する見解は、次のようなタイトルで速報された。稀有の年代資料を手にした名取武光の想いが素直に表れているように思われる。

「モヨロ堅穴の実年代を決定する唯一の資料—遼時代の素焼土器、昭和十六年第十一号堅穴出土—」

本文では、駒井和愛の鑑定意見を引用しつつ、次のような所見(名取1948b: 212-214)が示された(第14図、()・下線は筆者の補記)

- (1) 「この土器片(1)は中国の素焼土器であって、大陸で遼時代の開泰7年の銘ある石棺と共に、発掘された土器と同じ種類のものである」
- (2) 「その文様は刻線でりんかくをつくった中に、一種の型押文を施している。分布は奉天、熱河、ホロンバイル、トンキン城(東京城)などである」



第14図 モヨロ貝塚第11号竪穴の出土遺物
(名取1948b・c)

- (3) 「開泰7年は、西暦1018年に当るから、この土器片の年代は、今(1948年)から約930年前頃とゆうことになる」
- (4) 「したがって(オホーツク文化に属する)モヨロ第11号竪穴の実年代も、今から約900年前頃(約A.D. 1018年頃)と決定することができる」
- (5) 「遼時代の素焼土器は、樺太西海岸の本斗町の北に近い遠節から小破片が一つ発見されている。
(中略) 遼時代の文物が満州樺太を経て、遠くモヨロ竪穴に達した経路を示すものとして貴重な資料である(名取1948b: 214)」

これまでの研究では、「オホーツク文化」の年代を本州島に由来する「蕨手刀」に基づいて推定していた。今回の「遼時代の素焼土器」の発見と鑑定によって、大陸と本州島の双方から年代を検討する条件がようやく整えられた。

「竪穴の実年代」云々という名取の表現には、こうした研究上の、

そして方法論上の意義が込められていると考えられよう。

さて名取は、本書の中で11号竪穴の出土遺物を挿図で示している。クマの「骨偶」(2)や刀子など(3・4)である。これらの遺物はそれ自体としても、また年代論の観点からも、これまで不思議なことに注目されたことが無い。他方「遼時代の素焼土器」(A.D. 1018年)をめぐる名取の発言は、1960年代に至るまで「オホーツク文化」の存続年や実年代を検討するための根本資料として、直接的あるいは間接的に多くの研究者に援用されてきた。その一端は、すでに触れたとおりであるが、あらためて代表的な事例を挙げてみよう(以下、下線・傍点・()は筆者)。

(1) 河野広道(米村編1949:171, 河野1949:41)

モヨロ文化は、「おそらく鎌倉時代まで(A.D. 1192年～)千年以上続いたと思えます」。オホーツク文化は「800、900年前(A.D. 1149年, 1049年)^(註13)以後は消えてしまい」、その頃から「日本からの漆器、木器が非常にたくさん使われるようになった」。

(2) 駒井和愛(1952:42-44)

「遼代ごろの特徴を示している青銅製の小さい鐸も土器片(「遼時代の素焼土器」)も発見されているのであるから」、(中略)「網走やその他のオホーツク式の年代(の一端)は、今から凡そ一千年(A. D. 952年)ばかり前であろうと考えられる」。「註5:遼代の素焼土器」とした「破片」は、「モヨロ貝塚の年代の一端を示す貴重な資料と見做したい」。

この「年代の一端」という表現には重要な意味があるであろう。それは11号竪穴出土の土器群が、決してオホーツク文化終末期のソーメン紋土器を含まないことを意味していると考えられる。河野説(河野1955・58)が終末年代を鎌倉時代に求めていることも、「遼時代の素焼土器」がソーメン紋土器には伴わないという認識に基づくものであろう。これは山内博士の「十一、十二世紀」の「中国の遺品」説(山内1964)と関連する重要な論点として、ここで特に留意しておきたい。

(3) 駒井編(1964:167)

「名取武光氏はモヨロ貝塚第11号竪穴床面出土の土器(「遼時代

の素焼土器) について、駒井が遼代の土器と類似していると語ったと述べ、「オホーツク文化を約900年前のものとしている」。「北海道のオホーツク文化は平安時代から鎌倉時代にかけて、営まれていたと考えられる場合が多い」（中略）「第1類土器（「オホーツク土器の終焉」と擦文土器4類はきわめて近い年代に存したものであるといえよう」。「擦文土器4類の終末はだいたい室町時代であろうと思うので、第1類（「オホーツク土器」）もほぼ同じころまで存在したのであろう」。

(4) 佐藤達夫（1972：485）

「擦紋土器の年代に関しては、そのはじまりをほぼ8世紀に（佐藤1964b）、終末はモヨロ貝塚における（「遼時代の素焼土器」（A.D. 1018年）等の大陸系の渡来文物に基づく）オホーツク式の年代観（「名取1948b：212-214、山内1964：147」）、および上述の南貝塚式土器の年代観等から、ほぼ11世紀に求めることができよう」。

「オホーツク式土器の存続期間は、その型式変化からみて、おそらく11世紀の後半ないし末より12世紀（平安時代）、あるいは13世紀（鎌倉時代）はじめに至る、150年ないし200年程度かと推測される」。

このように1970年代の初頭まで、「遼時代の素焼土器」はオホーツク文化の年代論において、実に主導的な役割を担っていた。今では「忘失」されているが、どの論者もオホーツク文化は11世紀以降まで存続すると認めている。おそらく、「行方不明」になる以前の11号堅穴の出土遺物を観察し、貝塚地点の層位的な土器の出土状況（児玉1948・名取1948c・河野1958）もふまえて、それぞれの年代観が発表されていると考えられよう。

そこで以下、これまた今もなお「忘失」されているモヨロ貝塚編年の意義（柳澤1999b）を再確認しておきたい。それをふまえて、山内博士の「新北方編年」説（山内1964）の成り立ちについて旧稿の論点を補足し（柳澤2013b：57-140）、学史上の盲点となっている問題点をさらに掘り下げたい。

3) モヨロ貝塚の層位的な調査成果とは

「オホーツク文化」の変遷を考察する上で、土器編年に関する研究者の見解が一致したことは、これまで一度も無いであろう。道東部では、未だに「刻文土器」から「ソーメン文土器」への変遷を3～4段階の細分で捉えており、それをもとに「オホーツク系文化」と擦紋文化の関係が自在に推論されている。

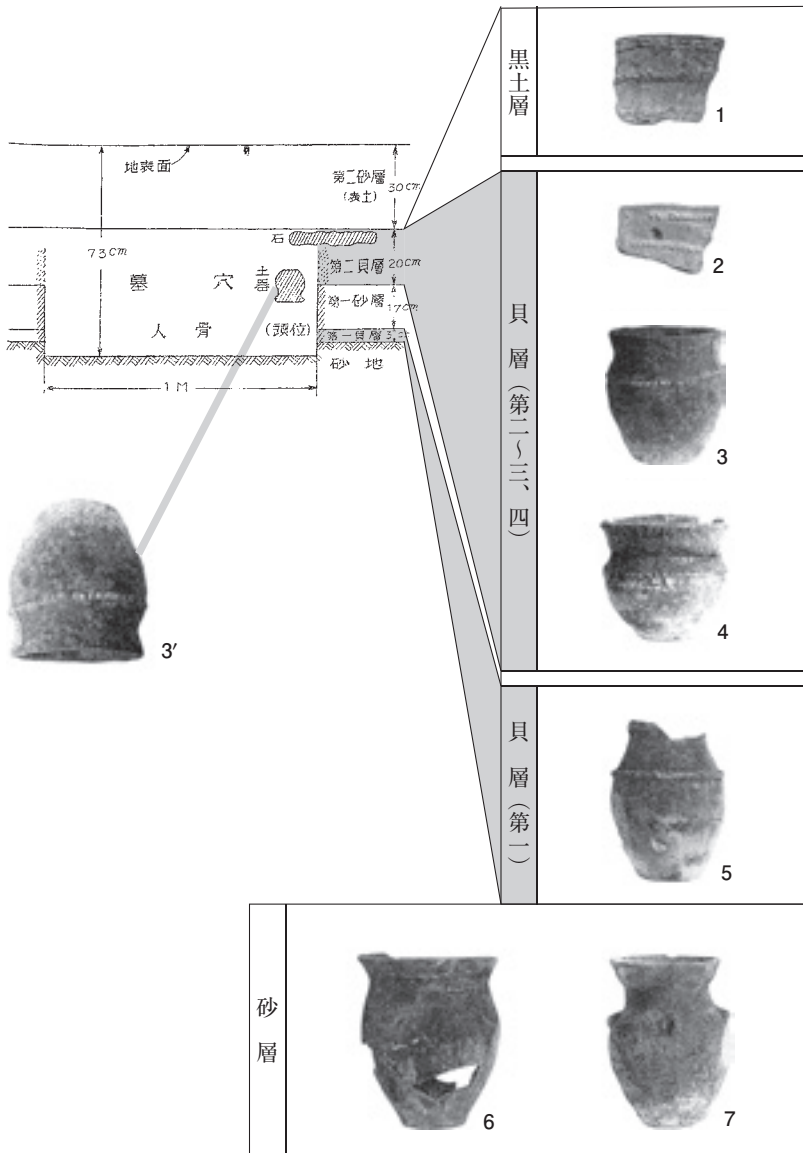
河野広道が提唱した「オホーツク式土器」(犀川会編1933)のうち、モヨロ貝塚の新資料は、1964年以前ではどのような編年されていたのか。「東大編年」(駒井編1964)で採用された標本例を除くと、公表された資料はごく限定されていた。それでも、様々な機会に発表された調査所見と出土資料を参照すると、1947・48年当時の「オホーツク式土器」の編年観を復元することは、それほど困難ではない。またその編年観は、最も新しいモヨロ貝塚の発掘資料からも、層位的な事実に基づいて容易に追認できる。

さて、学史上に「忘失」された情報の中では、特に7号墳と堆積土層の関係を示した模式図(第15図)が注目される(名取1948c)。この墳墓は「第二貝層」上部から切り込まれ、その一部に葺石が置かれていた。墓壙は深さ50cm未満で、「第一砂層」と「第一貝層」、砂層上部を掘り抜いて作られている。また遺体の頭上を覆うように、3例の擬縄貼付紋土器が伏せた状態で発見された。副葬品としては、刀子1点と髪容具?各1点が検出されている。

正式な概要報告によると(名取・大場1964)、「第3層は貝殻層で40cm前後(所により貝層が上下2層に分かれ、その間に黒土層を挟んでいる所もある)、第4層は砂層である」と指摘されている。「黒土層」が砂層の誤りで無いならば、「砂層」と「黒土層」によって上下に区別される貝層が存在していたことになろう。

大場利夫と共に調査に参加した児玉作左衛門の観察によれば、モヨロ貝塚の貝層は、「場所によって二層乃至三層若しくはそれ以上になっていることがある」。「貝層は二〇～三〇糎から一～二米に及ぶものがあり、既に述べたように二層、三層又はそれ以上の層を示している」(児玉1948:12-13, 72)という。これは昭和22・23年度調査の記述である。したがって4×15mの

道東における「オホーツク文化」年代観の改訂（前篇）



第15図 モヨロ貝塚「第7号墳と地層」の模式図（名取1948c）と貝塚（地点）出土土器の層序対比

規模で設定した「北トレンチ」と、「南トレンチ」内での堆積状況を伝えたものと考えられる。

砂層と黒土層を介して累積した貝層が2～3枚か、又はそれ以上であったとすると、間層として認められるものは、それが部分的であったとしても、少なくとも3枚は存在したことになる。こうした間層が、しばしば土器型式の年代差を捉える手掛りになることは、発掘における経験則として広く認められている。

ここでは南・北のトレンチ内において、「砂層」と「黒土層」挟む貝層が少なくとも3枚は識別されたと想定し、報告された資料の層位的な状況を推論してみたい(柳澤1999b:55-58ほか)。掲載された資料は数少ないが、砂層から黒土層に至る代表例として1～7の資料が挙げられる。

貝層出土の2～5例は大きく4単位に細分される。刻紋・沈線紋土器の破片を除くと、これ以外の資料は見当たらない。以下、層序番号は便宜的にアラビア数字で表記する。

- (1) 刻紋土器Bの「古いもの:(古)」(5:第1貝層)
- (2) 第1砂層(第1間層)
- (3) 刻紋土器Bの「新しいもの:(新)」(4:?)
- (4) 擬縄貼付紋土器の「古いもの:(古)」(3:第2貝層)
- (5) 擬縄貼付紋土器の「新しいもの:(新)」(2:?)

これらの土器群のうち7号墳の「地層」模式図に当て嵌まらないのは、2例と4例である。どちらも「貝層」から出土したと報告されているから、7号墳とは異なる場所で検出されたと考えられる。

そこで貝塚と墳墓の層序を統合的に考えると、4例は「第1-2貝層」となり、2例は「第3貝層」と捉えられる。さらに各貝層を分界する間層として、(2)・(3)間には「第2砂層(第2間層)」を、(4)・(5)間には「第3砂層(第3間層)」の存在が推定される。

そのように堆積の状況を復元すると、次のように編年される。

- (1) 第1貝層:5例(刻紋土器Bの「古いもの」)
- (2) 第1間層(「第1砂層」)
- (3) 第1-2貝層:4例(刻紋土器Bの「新しいもの」)

- (4) 第2間層
- (5) **第2貝層**：3例（擬縄貼付紋土器の「古いもの」）
- (6) 第3間層
- (7) **第3貝層**：2例（擬縄貼付紋土器の「新しいもの」）

間層によって隔てられた各類の土器は、型式学的に見ると明らかに不連続であり、欠落した時期（「中間型式」：山内1935, 柳澤1990a・2006c：74・157-163）が存在すると考えられる。おそらく堆積の中心が別地点に移動したために、必ずしも土器の変遷は連続しないのであろう。(1)~(7)の序列に貝層下の刻紋土器A（6・7）と黒土層のソーメン紋土器（1）を加えると、「オホーツク式土器」の変遷はかなり細かく捉えられる。

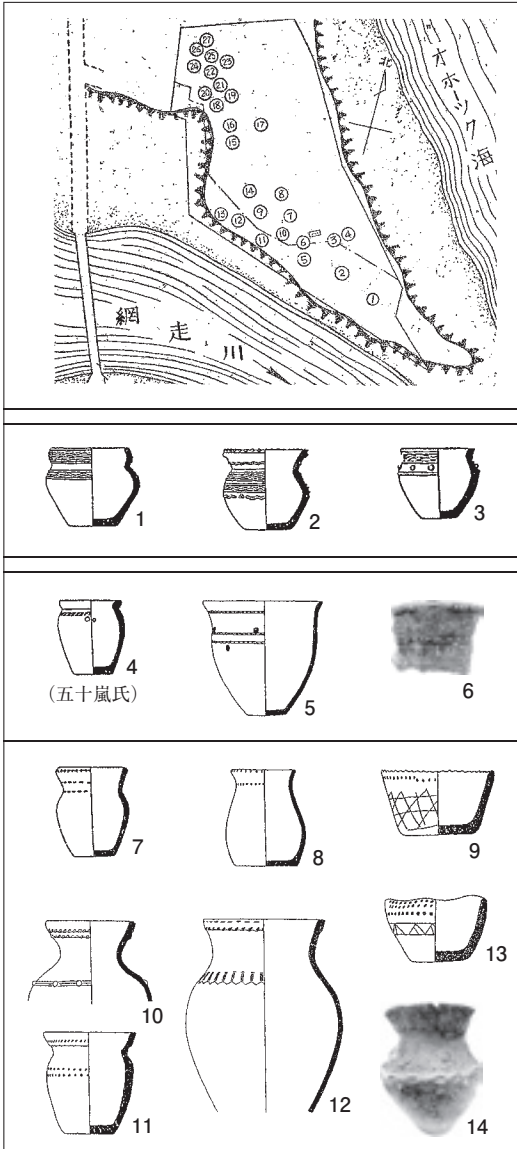
以上の層位事実や10号竪穴の所見と河野広道の「型」別編年との関わりについては、前節で触れたとおりである。そこで1964年に公表された情報になるが、これまで通説では注目されていないモヨロ貝塚資料（柳澤2009b：第11図22・23）を用いて、次に層序に係わる推論の妥当性を検証したい。

4) 清野謙次のモヨロ貝塚資料から

清野謙次は日本先史時代の人類学研究を目的として、樺太や千島諸島および北海道島の東部で盛んに発掘調査を行い、その資料を大冊（『日本貝塚の研究』）に纏めて刊行した（清野1969：496-517）。それを一覧すると、貴重な資料が随所に掲載されている。モヨロ貝塚の節においても、相当量の出土遺物が実測され、丁寧な記載と説明がなされている。

それによると、モヨロ貝塚を発掘したのは大正15年8月14~16日の3日間であったという。おそらく、地元好古家の米村喜男衛と五十嵐竹五郎の案内を受けたのであろう。先ず、砂丘が海へ最も突出した地点（「第1地域」）を発掘し、続いて、そこから遥かに奥まった海から遠い所（「第2地域」）を発掘している（第16図）。調査地点は正確に特定できないが、記述された層位と土器の出土状態は、簡略ながらも貴重な情報になっている。

まず「第1地域」の状況である。ここでは常に浮紋土器が出土し、縄紋土器などは見られなかったという。浮紋土器とは「ソーメン土器」と呼ばれるもので、小型の完形品2点、石鏃10数個が出土し、人骨1体（1号）も



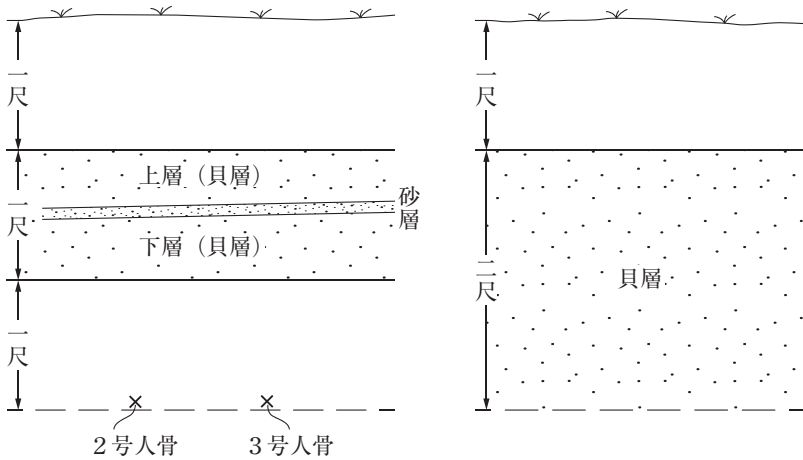
第16図 「モヨロ遺跡竪穴分布図」とモヨロ貝塚の出土土器（清野1969）

検出された。遺物は1～5尺の深さの黒色砂層から出土し、獣骨を伴う。また「ソーメン土器」は、「末期」に当たるとの正確な認識を示しており、注目される。

図示された資料の範囲では、「第1地域」の「ソーメン土器」には1～3例が該当すると思われる。これは1964年に報告された黒土層の資料（第15図1）に後続するものであり、新しい時期のソーメン紋土器が纏まっていると認められる。

次に「第2地域」である。こちらでは「極めて重要な（層位的）所見」が得られたという（第17図）。「貝層が上下に2層に分かれて」、その間に「砂の薄層がある。」

(1) 下層：縄紋薄手土器、往々篋で描いた沈紋のある土器片が出る。



第17図 清野謙次のモヨロ貝塚「第2地域・第3地域」発掘地点の層序模式図（清野1969より編成）

(2) 上層：無縄紋の焼きの弱い「ソーメン土器」が出る。

上層のソーメン紋土器は第1地点よりも焼きが甘く、浮紋や「上塗」は剥奪しやすいと指摘されている。図示されたものでは、第16図の5例や6例等の擬縄貼付紋土器に相当するものと思われる。他方、間層を挟む下層から出土した沈紋を施す土器片とは、おそらく9例や13例を指すのであろう。これらは、刻紋土器Aの新しいもの（10～14）から、刻紋土器Bの古いもの（7・8）に伴うと考えられる。

清野は貝層が薄くなった面から、その下部にかけて掘削を続け、地表下3尺のレベルで2・3号人骨を発見している。おそらくこの層準で刻紋土器A（10～14）が纏まって出土したのであろう。

「第3地域」では厚さ2尺の貝層を掘っているが、土器片のみであったという。7～14例は、いずれも完形品かそれに近いものである。したがって、これらは「第2地域」の出土資料と推定される。「第3地域」ではどのような土器が検出されたのか、今のところ良く分からない。

このように清野の発掘資料を整理すると、1964年の東大報告（名取・大場1964）と同様に、ほぼ「砂層（刻紋土器A）→下部の貝層（刻紋土器B（古）

→砂層（間層）→上部貝層（擬縄貼付紋土器）、という層位事実が捉えられる。これに地点差と型式差を示唆する「第一地域」のソーメン紋土器を加えると、先に層序に基づいて推論した「モヨロ貝塚編年」は、同じ貝塚内の旧き清野謙次の調査（大正15年）においても把握され、又1969年には追認されていたと言えるであろう。

5) 『常呂』編年以前に周知されていた層位事実の対比

モヨロ貝塚における「オホーツク式土器」の層位的な出土状況については、これまでどのような検討がなされているであろうか。『常呂』（1972年）以前では、まず1948・1949年（昭和23・24）の発掘資料がその筆頭となる。しかし、その報告は遙かに遅れ、『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（下）』（1964年）の「別篇」において、ようやく附載された（大場・名取1964：文献1）。次に注目されるのは、同じく「別篇」に掲載された10号竪穴の重複事例である（佐藤1964b：文献2）。それに後続するのが、先に紹介した清野謙次の調査例である（清野1969：文献3）。

これらの層位出土の事例を統合的に対比すると、第18図のような編年図式が得られる^(註14)。間層を省いて、古い順に各時期の標本例を示してみよう。

(1) 砂層に対比される土器群

刻紋土器A「古いもの」(6) → 刻紋土器A「新しいもの」(20・21, 12?)

(2) 貝層（古い部分）に対比される土器群

刻紋土器B「古いもの」(5, 12?, 19) ≡ 擦紋Ⅲと融合したキメラ(折衷)土器 (18)

(3) 貝層（新しい部分：その(1)）に対比される土器群

刻紋土器B「新しいもの：末」(4)

(4) 貝層（新しい部分：その(2)）に対比される土器群


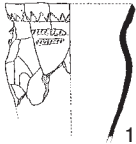
擬縄貼付紋土器「古いもの」(3 ≡ 9・11 ≡ 15~17)

(5) 貝層（新しい部分：その(3)）に対比される土器群

擬縄貼付紋土器 (2)

(6) 黒土層に対比される土器群

道東における「オホーツク文化」年代観の改訂（前篇）

層序	モヨロ貝塚		モヨロ貝塚10号		清野（1969）
第二砂層 （表土）					
〔黒土層〕	 1	 7	 8	 13	 14
貝層／第二貝層 （他）	 2	 3	 4	 9	 15
				 10	 16
				 11	 17
第一砂層					
貝層／第一貝層	 5				 18
			 12		 19
砂層／砂地	 6				 20
					 21

第18図 モヨロ貝塚1964年報告の貝塚地点・10号竪穴の出土土器と清野資料の対比

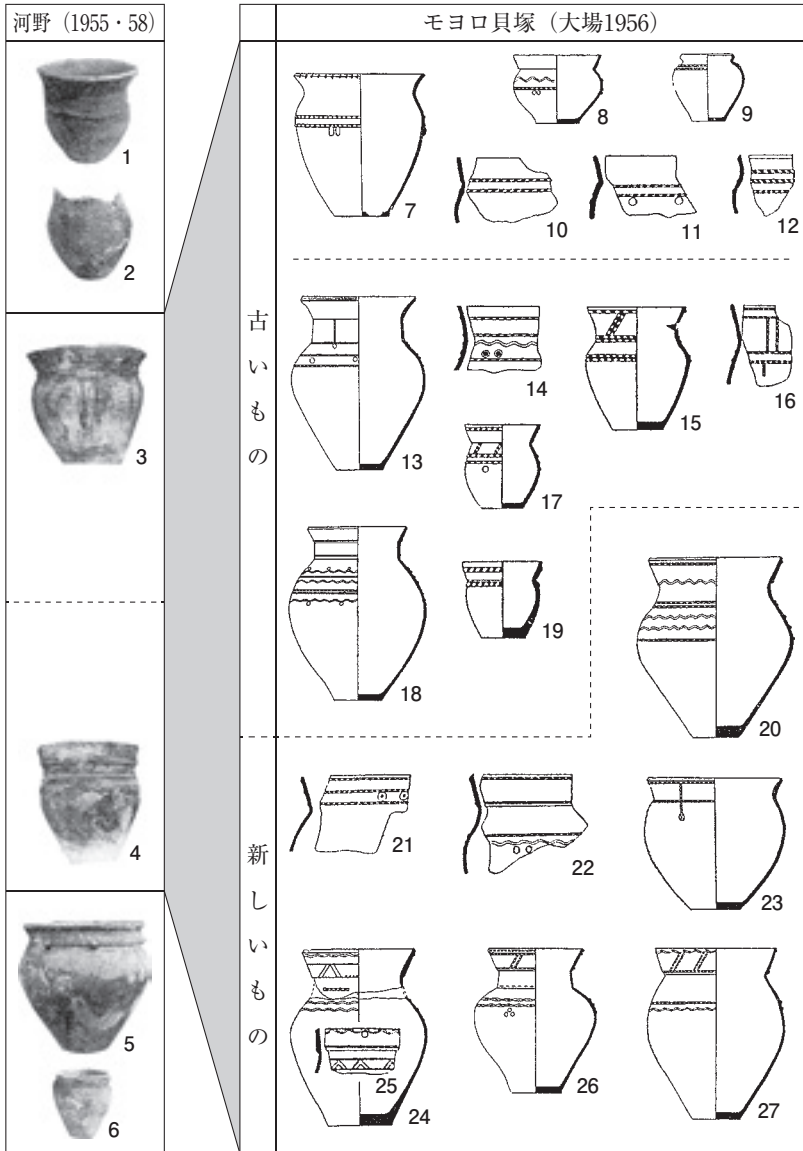
ソーメン紋土器 1～3期 (7→1 = 8→13・14 : 「第1地域」)

(1)～(6)類の各单位は、それぞれ層位的な纏まりを以て出土していると考えられる。欠落した小細別を他遺跡から補えば、小細別レベルのスムーズな変遷が辿れる。1969年以前の資料から、そのように細かな編年案を層位的に編成できるとは、通説の立場ではおそらく想像できないことであろう。こうした作業は、いわゆる「東大編年」と山内博士の「新北方編年」説が対立した1964年以前でも、「土器」は「土器」からの原則で分析すれば、十分に可能であったと考えられる。


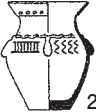

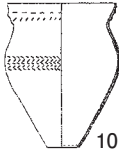

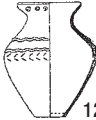


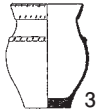
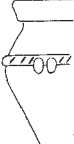
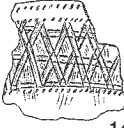

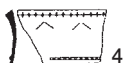
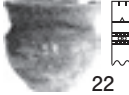



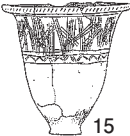








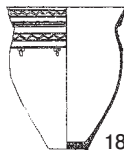


1960年代において、山内博士と「東大編年」の執筆者が参照したのは、戦後も北海道考古学を主導した河野広道の二つの著作（『斜里町史（先史時代篇）』・『網走市史（上巻）』（河野1955・1958）であったと考えられる（柳澤2013b）。河野の編年体系は今では「忘失」されているが、「東大編年」より遥かに優れた内容を有している。その詳細については旧稿の記述（柳澤1999b・前掲：91-96, 2013bほか）に譲り、ここでは提示された標本例について改めて検討したい。

河野は土器の「型」別、すなわち山内博士の細別型式に準ずる概念のもとに、モヨロ貝塚とウトロチャシコツ下（西側平地）遺跡等の層位的な所見をふまえて「オホーツク式土器」を細分し、「A型」から「D型」への変遷を想定している（「型」別編年）。「A型」と「B型」では、主として施紋具の差異に着目し、「C型」では、「貼付式浮紋」を含む擬縄貼付紋の細かな変遷をたどり、最後の「D型」については、ソーメン状貼付紋の形態差を以て明瞭に区別している（第19図）。この編年構想^(註15)は、『斜里町史』（1955年）の中で最初に解説され、「A型」（1）・「B型」（2）、そして「D型」（5・6）の標本例が示された。

その翌年には、河野の新著に触発された大場利夫によってモヨロ貝塚出土土器の集成研究が発表された（大場1956）。多量の実測図が示され、これによって初めて「オホーツク式土器」の編年研究を行うための基本資料が十分に整えられたと言える。これを参照すると、河野が混合型（形）とした「AC型」や「BC型」などを含み、とりわけ「C型」に多数の類型（7～27）が存在することなどが、一目瞭然に理解されるであろう。おそらく河野は、



第19図 河野編年の標本例とモヨロ貝塚から出土した擬縄貼付紋土器の対比

大場 (1956)	児玉 (1948)	駒井編 (1964)	渡来文物
 <p>1 (参照：犀川会編1933)</p>  <p>2</p>	 <p>9</p>  <p>10</p>  <p>11</p>  <p>12</p>	 <p>19</p>  <p>20</p>	
 <p>3</p>	 <p>13</p>  <p>14</p>	 <p>21</p>	
 <p>4</p>		 <p>22</p>	 <p>26</p>
 <p>5</p>  <p>6</p>	 <p>15</p>	 <p>23</p>  <p>24</p>	 <p>27</p>  <p>28</p>
 <p>7</p>  <p>8</p>	 <p>16</p>  <p>17</p>  <p>18</p>	 <p>25</p>	 <p>29</p>

第20図 児玉作左衛門著『モヨロ貝塚』(1948)の土器標本と参照資料・渡来文物の対比

『斜里町史』において標本例の提示が不足していたことを痛感していたに違いない。

3年後に刊行された『網走市史』では、欠落していた「C型」（擬縄貼付紋）の新旧の標本例（3→4）を補い、また「革紐状の貼付紋」を施す「トピニタイ土器群Ⅱ」（菊池（徹）1972a）に相当する土器群を位置づけ、自ら調査したウトロチャシコツ下遺跡とモヨロ貝塚の層位事実に基いた「オホーツク式土器」編年の先進的な新体系を整えている（柳澤1999b・2013c：106-113）。

これまで通説編年の立場では、7～27例の擬縄貼付紋を用いる土器群（「C型」）の独立した時期をほとんど認めていない（駒井編1964，藤本1966，熊木2006～2012ほか）。道東では擬縄貼付紋土器の時期が抹消されており、道北では擬縄貼付紋・ソーメン紋を用いる独立した時期が存在しない、とされている（大井1972bほか）。この点から観ると、道北・道東における通説的な編年案は、未だ『斜里町史』や『網走市史』以前の段階に留まっていると言えるであろう。

6) 『モヨロ貝塚』（児玉1948）に見える編年観

さて、河野広道の「オホーツク式土器」編年（河野1955・1958）に先立ち、モヨロ貝塚の調査に参加し、その成果をいち早くまとめて刊行した研究者として、児玉作左衛門を逸することはできない。河野が斜里町・網走市の先史時代をまとめる際に、児玉の『モヨロ貝塚』を参照していることは、改めて論を俟たない。山内博士・佐藤達夫においても、当然ながら同じ事が言えるであろう。

モヨロ貝塚に係わる児玉の業績としては、オホーツク人の「アレウト（アリユート）人」説が著名であり、今でも学史上において言及されることがある。他方、「オホーツク式土器」の変遷と擦紋土器に係わる児玉の先端的な見解については、なぜか等閑に付されたまま今日に至っている（第20図）。

まず、モヨロ貝塚の層序についての児玉の見解は、先に触れたとおりである。土器・石器・骨角器の研究については、序文によると「大場利夫君の数年に互る努力の結晶である」、と記されている。したがって、本書に盛り込

まれた所見や引用資料に関しては、大場の貢献（大場1956）に拠るところがそれなりに在ったと推察される。しかし本文の記述を参照すると、次のような先端的な所見が目にとまる（太字・下線・傍点は筆者）。

- (1) 「擦紋式文化とオホーツク式文化は年代が略並行し且つ共に金石併用時代に属する」（2頁）
- (2) 「モヨロ貝塚から出土する土器は、主としてオホーツク式土器で其他、擦紋式土器、及び薄手縄紋式土器が少し出る」（19頁）
- (3) 擦紋式土器は「モヨロの貝層からはあまり多くは出ない。大抵は破片ぐらいなものであった」（14：「モヨロ貝塚発掘破片」, 15：「北見枝幸出土」）。（21-22頁）
- (4) これらの擦紋式土器（14・15）は、「大体オホーツク式土器と同じ時代のもので、アイヌが作ったものである」。（22頁）

山内博士が「新北方編年」説を構想する際に、これほど重要な記述と挿図に示された14例のキメラ(折衷)土器を見落したと考えられるであろうか。14例とピラガ丘遺跡のキメラ(折衷)土器の編年上の意義について、筆者はこれまで繰り返し論じている（柳澤1999b：21 図-7, 2006b：11図ほか）。それをふまえて、ここでは「擦紋式土器」の一例として図示された枝幸町の15例にも注目したい。これは「貝層」から出土した資料の代用品として例示されたものではなかろうか。事実、昭和22・23年度の調査資料には、15例に対比される土器片がかなり含まれている^(註16)。したがって、そのように理解することに矛盾は無いと考えられる。そこで、児玉が示した「オホーツク式土器」と貝層内の「擦紋式土器」（≒枝幸町15例）に対して、モヨロ貝塚の実測資料（大場1956）を層序にしたがって対比してみよう。

- (1) 砂層：刻文土器Aに対比されるもの（1～12）
- (2) 貝層（古い部分）：刻紋土器B（3・13・21）≒擦紋Ⅲ(古)とのキメラ(折衷)土器（14）
- (3) 貝層（中位の部分, その(1)）：刻紋土器B(新)（4 ≒22）
- (4) 貝層（中位の部分, その(2)）：擬縄貼付紋土器（5 ≒23）
- (5) 貝層（新しい部分）：擬縄貼付紋土器（6 ≒24）≒擦紋式土器（15：枝幸町例）

(6) 黒土層：ソーメン紋土器（7・8 ≒16～18≒25）

児玉が示した両土器の標本例は、自ら紹介した層序認識に基づいて整理すると、以上のとおりに編年される。ところでキメラ(折衷)土器の14例を「擦紋式土器」の範疇で捉えていることは、どのように理解すれば良いであろうか。肥厚しているように見えるその口縁部は、明らかに刻紋土器の特徴を備えている。胴部の紋様は擦紋Ⅲに由来するものであろう。こうしたキメラ(折衷)土器の類例としては、『北海道原始文化聚英』（犀川会編1933）に掲載された1例が挙げられる（柳澤2014a：194）。斜格子目紋を施した厚手の作りの完形品である。この紋様は少し下ると、14例の松葉状の斜格子紋に変化するが、それは単なる偶然ではあるまい。刻紋土器Bと擦紋Ⅲが道東において同時代に接触したと想定しないと、14例のような折衷土器の登場は容易に説明できないはずである。

つまり1948年の時点では、

- (1) 厚手の「オホーツク式土器」と「擦紋式土器」（擦紋Ⅱ）の接触に伴うキメラ(折衷)土器の製作（礼文島香深村：1）
- (2) 刻紋土器と「擦紋式土器」（擦紋Ⅲ）の接触に伴うキメラ(折衷)土器の製作（モヨロ貝塚：14）

という広域対比が、児玉が提示した標本例によって可能であったと考えられる。道北や道南におけるソーメン紋土器の存在は、夙に河野広道によって確認されていた（河野1935, 柳澤2003：155-158）。したがって、モヨロ貝塚資料の報告（駒井編1964）を待つことなく、河野による擦紋・オホーツク式土器の編年観（河野1955・1958）からも離れて、通説とは真逆の編年体系を編成することは何人にも十分に可能であったと思われる。児玉の編年観（(1)～(6)）に大陸系の渡来文物（26～29）を対応させると、その大半が貝層土器のいずれかに関係すると容易に想定れる。したがって山内博士の「新北方編年」説の根拠と成り立ちを理解するうえで、児玉の隠れた編年観は一つの有力な手掛かりになると言えよう。

7) 山内博士の「新北方編年」説の仕組み

博士の「新北方編年」説（山内1964）の成立事情については、旧稿で詳

しく論証を試みている（柳澤2013b：77-119）。今では「忘失」されている先学の学説や業績に関しても、その中で多くの問題点を指摘した。それらと以上の検討をふまえて、「新北方編年」説の原型を筆者なりに復元すると、第21図のように編成される。

これには、『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡（下）』の「別篇」で公表されたモヨロ貝塚の新資料（10～12・23）を引用している。その理由は協同研究者であった佐藤達夫から、10号竪穴の資料（14・19・20・24）に加えて、トコロチャシ遺跡やトビニタイ遺跡、そしてウトロチャシコツ下遺跡などの最新の調査成果を山内博士が教示されていた、と考えられるからである（柳澤：前掲）。



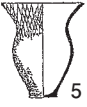


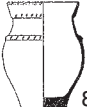
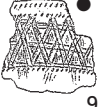
















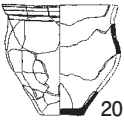




そのような理解のもとに、この編年図式の成り立ちを説明したい。まず擦紋土器に関しては、山内博士は周知のとおり戦前から、「オホーツク式土器」よりも先に終焉を迎えるとしている。その序列は、提示された標本例によると、児玉の編年資料（児玉1948、第20図）を博士が追認していると想定し、佐藤達夫の擦紋土器編年案（佐藤1972）をもとに図式的に示すと、

- (1) 擦紋Ⅲ(1)類（1）：山内（1933→1939）の標本例
- (2) 擦紋Ⅲ(6)類（2）：山内（1964）採用の新標本例（美幌町）
- (3) 擦紋Ⅳ(古)期（3）：山内（1964）採用の新標本例（美幌町）^(註17)
- (4) 擦紋Ⅳ(7)類

という流れで捉えられる。それに対して「オホーツク式土器」の側では、擦紋Ⅲ・Ⅳ期におけるキメラ(折衷)土器を根拠として、河野広道の著作や論文・発言を参照又は批判的に吟味し、さらに佐藤達夫の教示によるモヨロ貝塚・トコロチャシ遺跡・ウトロチャシコツ下遺跡などの層位事実をふまえて（柳澤2013b：106-119）、次のように編成されたと推察される。

- (1) 擦紋Ⅱ期における「オホーツク式」（厚手系）との接触（道央5例＝道北6例）から→擦紋Ⅲ(1)類の標式資料（1）への変遷の想定
- (2) 刻紋土器B（7・8）と擦紋Ⅲ(古)の接触に伴うキメラ(折衷)土器（9）の作製→擦紋Ⅲ(新)（2）への変遷、擬縄貼付紋を持つ刻紋土器B(新)への変遷（7・8→10）を想定。これは必然的に新標本の2例と10例を対比する編年となる。

道東における「オホーツク文化」年代観の改訂（前篇）

	擦紋土器	「オホーツク式」とキメラ(折衷)土器	渡来文物
擦紋文化期	 1  2	 5  6 ●  7  8  9 ●  10	 25  26
	 3  4	 13  14  15 ●  16 ●  17 ●  18 ●  11  12	 27  28
ポスト擦紋期		 19  20  21  22  23  24	

●：キメラ(折衷)土器

第21図 山内博士の「新北方編年」説の標本例と1964年以前の資料対比

- (3) 刻紋土器Bに施される主紋様の刻紋が消失すると、擬縄貼付紋土器が成立することとなる。1939年の標本例(13)は、10号竪穴床面出土の14例に対比される。11例は型式学的にみると、明らかに先行する特徴を持つ。11例→12例の層序に因み、11例に後続して「13・14例→12・15例」という変遷が想定される。
- (4) 擬縄貼付紋土器にも、14例に近接して古い時期のキメラ(折衷)土器(16)がある。『北海道原始文化聚英』に掲載された17例や大場が実測した18例は、どちらも擬縄貼付紋土器の新しいものと捺紋Ⅳの接触・交流を示すキメラ(折衷)土器となっている。
- (5) 「オホーツク式土器」の側では、多用した擬縄貼付紋をソーメン状の貼付紋に置換して、道東一帯にソーメン紋土器が成立する(19～24)。河野が戦前に発表した所見(河野1935)によると、道北から道南へも拡散していると考えられる(柳澤2003 155-158, 註12)。

以上のように、1964年以前に周知されていた資料や論考を参照し、同時に最新の発掘情報や概説書の記述などを検討した結果、山内博士の「北方編年」(山内1939)説は基本的に変更の必要がなく、河野の新しい編年観・年代観(河野1955・1958)への批判をふまえて、「新北方編年」説(山内1964)が組み立てられていると考えられる。児玉による9例(児玉1948b)や河野による6・17例(犀川会編1933)のキメラ(折衷)土器、貝層内における捺紋土器(=4)の伴出事実などが、この説の発表に際して重要な役割を担ったことは、敢えて説明を要しないことと思われる。

したがって、オホーツク文化に伴うとされた「十一、十二世紀の中国の遺品」(山内1964)、例えば「遼時代の素焼土器」(A.D. 1018年比定)や「北宋銭・青銅製の鈴等」などは、5例や6例などが9世紀代末に比定されることから見て、山内博士は(2)～(4)に至るいずれかの時期に対比したと容易に推察されるであろう。

それでは「中国の遺品」とされた大陸系の渡来文物は、8例から24例のいずれの土器と年代的に対応するのであるだろうか。まずは大陸側をフィールドとして、渡来文物の年代的な位置を細かく探ってみよう。

2014年4月5日稿 5月6日補

於 礼文島宿舎「カメとはまなす」

追記

冒頭に触れたとおり、本稿は5章を以て構成された筆者の退職に因む大部の論考の一部に当たる。以下に再掲した3～5章（後篇）については、『人文研究』の刊行に伴う諸般の事情から、一括しての掲載を見送ることとなった。2015年3月に上梓する新著、『北方考古学の新潮流』（第4章）において全篇を収録しており、「後篇」については、それを参照されたい（2014年10月14日、追記）。

3. 契丹・遼代土器の編年から見た「遼時代の素焼土器」
 4. 北海道島編年の見直しから「遼時代の素焼土器」編年へ
 5. モヨロ貝塚11号堅穴の文物と道東「オホーツク文化」年代観の改訂
- おわりに

謝辞

本稿の編年観の妥当性を検証するために、各機関に所蔵されている新旧の資料実査を行い、以下の皆様に格別のご配慮とご教示をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。

- (1) 北海道大学アイヌ・先住民文化研究センター（加藤博文、岩波連・長沼正樹：2014年3月）
- (2) 北海道大学総合博物館（江田真毅、天野哲也・小野裕子：2014年3月）
- (3) 紋別市立博物館（佐藤利和：2014年3月）
- (4) 旭川市立博物館（瀬川拓郎：2014年3月）
- (5) 天理大学附属天理参考館（藤原郁代：2013年10月）

また本稿の通読と校正については、千葉大学大学院博士後期課程OBの長山明弘・松嶋沙奈、後期課程在学の小林嵩の諸君にお世話になりました。末筆ながら心から感謝の意を表します。

註

- (1) 「鈴」と記載されているが、記述によると鐸と「鈴」（第2図17・18）を一括し、「鈴」と表記していると考えられる。
- (2) 因みに、菊池俊彦氏の著作（『北東アジア古代文化の研究』、1995年）を参照すると、大井晴男・大場利夫・河野広道・駒井和愛・名取武光・藤本 強・米村喜男衛に比べて、戦前・戦後の山内発言に対する関心が乏しいように思われる。その点は、本文の記述はもちろん、引用文献一覧、索引などからも容易に確認されることである（柳澤2013b：註24）。
- (3) このシンポジウムにおいて、山内博士の「新北方編年」説（山内1964）と、それをふまえた佐藤達夫の環オホーツク海域編年案（佐藤1972，柳澤1999a：77・89，1999b：51-52・93-94）は、刊行の段階で「ほとんど問題にできない」と総括され、ほぼ全否定する扱いがなされた（大井1982d）。そして『ニツ岩』（野村・平川編1982）の刊行を契機として、両氏の学説は学史的にも顧みられことが無くなり、学問上の市民権を失っている（柳澤2013b：57）。因みに、シンポジウムの成果を纏めた『オホーツク文化の諸問題』（1982年刊）に所収された「オホーツク文化関係文献目録」（大井晴男編1982）では、擦紋文化とオホーツク文化の年代学的な関係性を論じた佐藤達夫の代表論文、「擦紋土器の変遷について」（佐藤1972）が何故か省かれていることを、特に付言しておきたい（大井1970・1972a・1972bの論述・註を比較・参照）。
- (4) この編年問題は、当事者による再検討では百年河清を俟っても、容易に解決し得ないように思われる。したがって、筆者の編年構想が1999年以来全く等閑に付されている現状は、ある意味で当然の事態とも言えるかも知れない。一例として、『考古学ジャーナル』誌上や、その他の学術誌における一連の発言を参照されたい（榎田2008～2013，2010：註5）。
- (5) 『ニツ岩』（野村・平川編1982）の総括では、土師器や擦紋Ⅱの「共伴」について、「オホーツク式土器e群の段階に編年される住居址において、（1号住居址と2、3号住居址における様相は若干ことなるが）擦文第1ないし擦文第2の時期に編年される土器が遺構に伴って出土した事実をとりあえず提示しておきたい（註33）」（中略）「これらの意義とその評価については、オホーツク式土器および擦紋式土器全体の編年の構築、その年代観ともからんで、今後、多くの問題に波及するので、それらについては、あらためて考えてみ

たい（野村崇）」（傍点：筆者）と、慎重な筆致で記述されている。これは単に「東大編年」をはじめ、既存の学説と抵触する事への配慮ばかりでなく、大陸系の渡来文物が示唆する年代観との齟齬を念頭においた発言であると推測される。しかし、そうした慎重な問題意識は、その後の担当者の交代を反映して、個別の論文や北海道開拓記念館の解説書・特別展の図録などにおいて、速やかに「忘失」されたようである（右代1991・1993・右代1995ほか、北海道開拓記念館編1999、同館ほか編2008）。

- (6) 「オオーツク文化」の年代観に関連して、菊池俊彦氏は目梨泊遺跡から発見された「小銅鐸」を特に取り上げている（菊池1995b）。大陸側と北海道島では「小銅鐸」の年代観にずれがあると指摘し、「私にとってこれは大きな疑問であり、不可解な謎である」と率直な疑問を表明している。さらに、帯金具や青銅製の帯飾りにも言及し、そうした渡来品は、女真文化の「9世紀末～11世紀」の遺跡に見いだされると述べている。したがって、本来の「オホーツク文化」の終焉年代が、果たして通説どおり8～9世紀であるのかどうか、重大な疑念が生じることになる。そこで菊池氏は、(1)「目梨泊の墓の年代はもっと下がるのではないか」、あるいは逆に、(2)「ドゥーヴォエヤコルサコフの女真文化の墓の年代がもっとさかのぼるのではないか」、という問いを立てる。そして、目梨泊遺跡の報告書が2002年に刊行されて以来、「ずっと熟考しているのだが、いまだに考えあぐねている」、という状態であると述べている（菊池2004：163-168）。しかしながら、こうした疑問点は、1976年の論文を発表した当初から、実は伏在していたのではなからうか。近年では、環オホーツク海域に拡散した北宋銭（「11～12世紀代」）と「オホーツク文化」の関係性をめぐって、さらに「熟考」を要する年代学上の課題に遭遇されている（菊池2009：149-150）。以下は、北宋銭をめぐるその所見の摘要である（下線・傍点：筆者）。

- a. 北宋銭はアムール河中・下流域のアムール女真文化（パクロフカ文化ともいう）の遺跡から出土しているので、十一から十二世紀にアムール河中・下流域には北宋銭が持ち込まれていたことがわかる。
- b. ここで興味深いのは、古コリヤーク文化とオホーツク文化遺物の対応である。オホーツク文化の遺跡からも北宋銭が発見されている。稚内の宗谷岬に近いオンコロマナイ貝塚のオホーツク文化の主体包含層から「熙寧重宝」（熙寧6 [1073] 年鑄造）が、また網走のモヨロ貝塚からは「景祐元宝」（景祐元 [1034] 年鑄造）が出土した。

まさにこれらのオホーツク文化の北宋銭は、アムール河下流域のアムール女真文化（＝パクロフカ文化）（[10～13世紀：第5図]参照）からもたらされたのであろう。

このように菊池氏は、北宋銭は北海道島の「オホーツク文化」に伴う、すなわち「共伴」するものと明確に認めている。したがって、「オホーツク文化」の終焉年代は必然的にA.D. 1073年以降に想定され、1964年の山内博士の「新北方編年」説（山内1964）の年代観（「十一、十二世紀の中国の遺品を持っている」）に接近することになる。しかし菊池氏はその後も、ソーメン紋土器と沈線紋土器を「9～10世紀」（菊池1993：第9図）とする1976年以來の年代観を改訂していない。したがって先の青銅製の「小銅鐸」とともに、11世紀代の「北宋銭」をめぐる年代学上の明らかな矛盾は、現在もお解消されていないと推察される。また、この問題に関連して、宇田川洋氏の旧き発言を参照すると、通説では「忘失」されている、そして宇田川氏自身も又「忘失」している問題点の所在が、一目瞭然に理解されるであろう（宇田川1977：168-170、（ ）・下線：筆者）

- a. （オホーツク文化の）遺跡の年代をきめる上で重要なものに貨幣があります。
- b. 北海道のオホーツク文化に属すると考えられてよいものは、オンコロマナイ貝塚の熙寧重宝（北宋熙寧6：1073年）、モヨロ貝塚の景祐元宝（北宋景祐元年：1034年）があります。
- c. このように、北宋銭の年代からオホーツク文化の年代の一点は、十一～十二世紀に考えることができるわけです。

この年代観は、「中国の遺品」をめぐる山内博士の「新北方編年」説（山内1964）と本質的に何ら変わらないと認められよう。しかし、a～cの所見を述べた節においても、また他の章・節でも、山内博士の論考は引用・参考の文献欄に掲げられていない。したがって、これは宇田川氏が初めて考案したオリジナルな年代観なのであろう。この点は詳らかでないが、上に引用した菊池俊彦氏の「北宋銭」をめぐる発言は、北海道島の通説編年体系において、「オホーツク文化」の終焉年代の問題が未解決であることを、何よりも象徴的に示していると言えるであろう。

- (7) その一例として、宇田川氏が『北の異界—古代オホーツクと氷民文化—』（2002年刊）の一節において、北方史の年代的な枠組みを語る際に、右代啓視氏の論考（右代1991・1995）を全面的に引用していることが挙げられる（宇

田川2002)。

- (8) 「8世紀」代に比定された「貼付文土器」の標本例を一覧すると、かなり年代幅のある資料が選択されている(第10図)。擬縄貼付紋土器では、「古い部分」(1)から「新しい部分」(2)まで、ソーメン紋土器でも1期(3~5)・2期(6)、そして3期(7・8)にまで及ぶ。これらの土器には不思議なことに、8世紀代の「擦文前期」土器との接触や交流を示す特徴は全く認められない。したがって道東部において、この時期に存在するはずのキメラ(折衷)土器を一例も指摘できないのであろう。年代的には、これらの土器群は11~12世紀の範囲に収まるものであって、それから400~500年も年代が遡ることは、まず考古学的に在り得ない事と考えられる(柳澤2008c・2011bほか)。
- (9) 因みに、右代啓視氏の北方編年に係わる論考を改めて参照すると、山内博士の説に対して、研究史上も学説に関しても何らの関心を示していない(右代1991:23-25・1995)。その理由は良く分からないが、菊池俊彦氏の場合(菊池俊1976・1995a)と基本的に似ているように思われる。先行する大井晴男や菊池徹夫氏・宇田川洋氏の基本姿勢と比べると、まさに好対照をなすと言えよう(大井1970a・b, 1972b・1973ほか, 菊池1972a, 宇田川1977)。
- (10) 臼杵勲氏の「オホーツク式土器」編年の標本例は、すでに2007年の論考で用いられているが、特に相異同は見当らない。
- (11) この点に関連して別の論文を参照すると、「同仁文化以後のパクロフカ文化の段階にもアムール河口からサハリンへ文物の流入は続いている。しかし北海道には断片的な資料が見られるのみで、擦文文化との融合を進めていくのである」(臼杵2010b:14)、という記述が見える。これが仮に11世紀代を示唆する文物を指しているとするれば、「オホーツク文化」ではなく、「擦文文化」に伴うと見做していることになろう。それに関連して、ほぼ同時に発表された論考では(下線・傍点:筆者)、「7世紀ころから、靺鞨集団はサハリン・北海道に分布したオホーツク文化集団と交流を行い、金属器などの文物をもたらしていた。その後9世紀には交流が下火になり、北海道のオホーツク文化は北海道に併存していた擦文文化に吸収されることになるが、サハリンを経由した文物の交流は若干であるが、継続していた。オホーツク文化の代表遺跡である網走市モヨロ貝塚では、小鐸や北宋銭などオホーツク文化期終了後の10世紀以降の遺物が出土している」(註(6)参照)と述べ、これらの文物は契丹時代における、サハリンの「オホーツク文化」集団や女真系集団と擦文文化集団の交流によってもたらされたものである、と論じている(臼杵

2010c : 124-125)。この場合、小鐸や北宋銭（オンコロマナイ貝塚の事例も含まれる）が、「果たしてオホーツク文化終了」以後の所産であるのかどうか、その根拠が改めて問われよう。駒井和愛・原田淑人・名取武光・河野広道・宇田川洋・菊池俊彦の諸氏が「遼・金代」の文物と認めた例品が、なぜオホーツク文化には伴わないものと、新たに鑑定されたのであろうか。因みに契丹時代、すなわち遼時代の文物としての「素焼土器」もまた、臼杵勲氏の編年観・年代観によると、オホーツク文化の11号堅穴には伴わない、遙か後代の文物と見做されることになる。それは果たして、先史時代の実事と言えるのであろうか。

- (12) 「オホーツク文化」の存続年代の下限は、何故に2008年論文（宇田川2008a）の記述と編年表で異なるのであろうか。いささか不思議に思える事であるが、それはサハリン島・北海道島の年代対比を¹⁴C年代に依拠し、諸文化の併存を認める右代啓視氏の編年案（右代1991・1995）の全面的な引用に由来すると想定すれば、一応の理解は可能になるように思われる（註(7)参照）。
- (13) 「オホーツク文化」の終焉年代を、A.D. 1049年ないし1149年以降と推定した根拠はいくつか想定される。その一例として、「遼時代の素焼土器（A.D. 1018年に比定）」には終末段階のソーメン紋土器が伴出していない、という発掘時の所見を反映していると考えられる。
- (14) 文献1～3に見える所見に加えて、佐藤達夫も参加した1949年のウトロシャチコツ下遺跡1号堅穴の発掘調査の層位的な成果（河野1955・1958, 宇田川編1982）を参照すると、山内博士がなぜ戦前の学説（山内1964）を基本的に踏襲する姿勢を示したのか。また、なぜ佐藤が独自の観点から環オホーツク海域編年案（佐藤1972）の発表に踏み切ったのか、その隠れた事情の一端を推察できるであろう（柳澤1999b・2012a・2013a・2013b : 77-121, 2013c : 106-113）。
- (15) 河野広道は、ウトロシャチコツ下遺跡1号堅穴の画期的な層位事実（河野1955・1958）に加えて、a. モヨロ貝塚における層位所見（児玉1948 : 12・72, 名取1948a : 313）を参照し、b. さらに自らもモヨロ貝塚（1947・1948年）の層位資料を実査し（河野1958 : 123）、c. それらの統合的な所見に基づいて「型」別の「オホーツク式土器」編年案（河野1955・1958）を編成したと考えられる（柳澤1999b : 52-70, 2013b : 77-121・2013c : 106-113）。
- (16) 名取武光が調査したモヨロ貝塚の資料について、筆者は2011～2013年にかけて悉皆的に実査しており、擦紋土器の出土に係わる所見はその際に得たもの

である。機会を俟って、他の資料も含めて詳しく論じる予定である。

- (17) 山内博士が「日本先史時代概説」（佐藤達夫と共著）に引用する土器標本として、どのような経緯から美幌町図書館の旧所蔵資料（2・3, 石附1969: 註21）を採用したのか、その点はなお詳らかでない（柳澤2013b: 98-105）。その事情を知る方に是非ともご教示をお願いしたい。

図版出典

- 第1図 1: 名取 (1948b)
- 第2図 1~4: 河野 (1955)、米村 (1950: 代用) 5・6: 河野 (1955)
7~13: 宇田川編 (1981) 14: 名取 (1948b) 15: 馬場 (1940) 16: 米村 (1950) 17~19: 児玉 (1948)・名取 (1948c) A・B: 平光 (1929a・b)
- 第3図 1~35: 柳澤 (2013b: 第6図) 36~38: 児玉 (1948)・名取 (1948c) 39: 米村 (1950)
- 第4図 1・4~8・16~20: 駒井編 (1963・1964) 2・3: 大場・児玉 (1958) 9~15: 藤本 (1966) 21~23: 八幡ほか (1966) 24: 名取 (1948b) 25: 米村 (1950) 26: 大井・大場編 (1973)・菊池 (俊) (1976・1995a)
- 第5図 1~42: 菊池 (俊) (1976・1995a)
- 第6図 1~5・7~10: 駒井編 (1964) 6: 石附・北構編 (1973) 11~14: 東京大学文学部考古学研究室編 (1972) 15: 名取 (1948b) 16: 米村 (1950) 17: 大井・大場編 (1973)・菊池 (俊) (1976・1995a)
- 第7図 1~22: 野村・平川編 (1982) 23: 名取 (1948b) 24: 馬場 (1940) 25: 大井・大場編 (1973)・菊池 (俊) (1976)・(1995a) 26~28: 児玉 (1948)・名取 (1948c)
- 第8図 1: 東京大学文学部考古学研究室編 (1972) 2・3: 駒井編 (1963) 5・6: 金盛 (1976a) 7~13: 金盛 (1981) 14~20: 宇田川 (1988) 21: 名取 (1948b) 22: 米村 (1950) 23: 大井・大場編 (1973)・菊池 (俊) (1976・1995a)
- 第9図 1~7: 菊池 (俊) (1993) 8~10: 児玉 (1948)・名取 (1948c) 11: 名取 (1948b) 12: 米村 (1950) 13: 大井・大場編 (1973)・菊池 (俊) (1976・1995a)
- 第10図 1~8: 右代 (1991) 9~20: 右代・平川ほか (1995)

- 第11図 1～8：臼杵（2007・2010）
第12図 名取（1948c）
第13図 兎玉（1948）
第14図 1～4：名取（1948b・c）
第15図 1～3・3'～7：名取・大場（1964）
第16図 1～5, 7～13：清野（1969） 4：寄贈又は購入資料 6：藤原編（2002） 14：撮影資料
第17図 清野（1969）より編成
第18図 1～6：名取・大場（1964） 7～12：佐藤（1964b） 13～16, 18～21：清野（1969） 17：藤原編（2002）
第19図 1～6：河野（1955・1958） 7～27：大場（1956）
第20図 1：犀川会編（1933） 2～8：大場（1956） 9～18：兎玉（1948） 19～25：名取・大場（1964） 26：名取（1948b） 27：米村（1950） 28：大井・大場編（1973）・菊池（俊）（1976）・（1995a） 29：名取（1948c）・兎玉（1948）
第21図 1～3・21・22：山内（1964） 4・7・9：兎玉（1948） 5：後藤・曾根原（1934） 6・13・17：犀川会編（1933） 8・18：大場（1956） 10～12・14・19・20・23・24：名取・大場（1964） 13：山内（1939） 15・16：斎藤（1933） 25：名取（1948a） 26・27：兎玉（1948）・米村（1950）・名取（1948c） 28：米村（1950）

参考・引用文献

- 網走市立郷土資料館編 1986「モヨロ貝塚」『網走市立郷土資料館収蔵考古資料目録』1
天野哲也 1979「オホーツク文化の展開と地域差」『北方文化研究』12
天野哲也 1981「土器群の型式学的変化」『香深井遺跡（下）』東京大学出版会
天野哲也 1985「オホーツク社会」のメタル・インダストリーに関する基礎的考察」『北方研究』17
天野哲也 2003「オホーツク文化とは何か」『新北海道の古代』2（続縄文・オホーツク文化）北海道新聞社
石井 淳編 2006「H519遺跡」『札幌市文化財調査報告書』80

- 石附喜三男 1969「擦文文化とオホーツク式土器の融合・接触関係」『北海道考古学』5
- 石附喜三男・北構保男編 1973『伊茶仁遺跡 B地点発掘報告書 1972～1973』北地文化研究会
- 伊東信雄 1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田博士追悼記念国史論集』
- 今野春樹 2002「遼代契丹墓出土陶器の研究」『物質文化』72
- 今野春樹 2003「遼代契丹墓の研究—分布・立地・構造について—」『考古学雑誌』87-3
- 上野秀一 1974「N162遺跡」『札幌市文化財調査報告書』5
- 上野秀一 1980「K460遺跡」『札幌市文化財調査報告書』22
- 右代啓視 1991「オホーツク文化の年代学的諸問題」『北海道開拓記念館研究年報』19
- 右代啓視 1993「オホーツク文化の拡散と適応の背景」『地方史研究』245
- 右代啓視 1995「オホーツク文化にかかわる編年対比」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館
- 右代啓視 1999「オホーツク文化」『アイヌ文化の成立』（常設展示解説書2）北海道開拓記念館
- 右代啓視 2003「オホーツク文化の土器・石器・骨角器」『新北海道の古代』2（続縄文・オホーツク文化）北海道新聞社
- 右代啓視 2013「オホーツク文化の進出」「海洋の民—オホーツク文化—」『古代北方世界に生きた人々—交流と交易—』北海道開拓記念館ほか
- 右代啓視・平川善祥ほか 1995「雄武堅穴群遺跡」『北海道開拓記念館研究報告』14
- 右代啓視・山田悟郎・平川善祥・小林幸雄・佐藤隆広 1995「オホーツク文化の遺跡から出土した大陸系遺物」『「北の歴史・文化交流研究事業」研究報告』北海道開拓記念館
- 白杵 勲 2004a「大陸と北海道」『北海道考古学』40
- 白杵 勲 2004b「サハリン・アムールの古集団と北海道」『環オホーツク』12
- 白杵 勲 2004c「靺鞨文化の年代と地域性」『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣出版
- 白杵 勲 2004d『鉄器時代の東北アジア』同成社
- 白杵 勲 2005「香深井A遺跡出土陶質土器再考」『海と考古学』
- 白杵 勲 2007「北東アジアの中世土器地域圏」『北東アジア交流史研究』塙書

房

- 白杵 勲 2010a「アムール川流域・サハリンとオホーツク文化」『北海道考古学会2010年度大会 オホーツク文化とは何か』北海道考古学会
- 白杵 勲 2010b「女真の考古学」『北東アジアの歴史と文化』（菊池俊彦編）北海道大学出版会
- 白杵 勲 2010c「契丹・女真との交流」『日本の対外関係』3（通交・通商圏の拡大）吉川弘文館
- 宇田川洋 1971「結語」『弟子屈町下籬別遺跡発掘報告』弟子屈町教育委員会
- 宇田川洋 1975「サシルイ北岸遺跡の調査」『羅臼町文化財報告』2（幾田）
- 宇田川洋 1977『北海道の考古学』2 北海道出版企画センター
- 宇田川洋 1988『アイヌ文化成立史』北海道出版企画センター
- 宇田川洋 2002「もう一つの日本列島史」『北の異界—古代オホーツクと氷民文化—』東京大学出版会
- 宇田川洋 2008a「知床の概要」『知床の考古』（しれとこライブラリー9）斜里町教育委員会
- 宇田川洋 2008b「擦文・オホーツク・トピニタイ文化」『知床の考古』（しれとこライブラリー9）斜里町教育委員会
- 宇田川洋編 1981『河野広道ノート 考古篇1』北海道出版企画センター
- 内山真澄・熊木俊朗・藤沢隆史編 2000『香深井5遺跡発掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 宇部則保 2002「東北北部型土師器にみる地域性」『海と考古学とロマン』（市川金丸先生古稀を祝う会編刊）
- 宇部則保 2009「香深井1遺跡の土師器について」『北海道考古学』45
- 宇部則保 2010「9・10世紀における青森周辺の地域性」『古代末期・日本の境界』森話社
- 宇部則保 2011「蝦夷社会の須恵器受容と地域性」『海峡と古代蝦夷』高志書院
- 恵庭市教育委員会 1987『カリンバ2遺跡』
- 遠藤龍畝 1995「ウサクマイN・蘭越7遺跡における考古学的調査」『千歳市文化財調査報告書』20
- 大井晴男 1966『野外考古学』東京大学出版会
- 大井晴男 1970a「擦文文化とオホーツク文化の関係について」『北方文化研究』4
- 大井晴男 1970b「土器群の型式論的変遷について—型式論再考—（上・下）」『考

古学雑誌』67-3・4

- 大井晴男 1972a「北海道東部における古式の擦文式土器について—擦文文化とオホーツク文化の関係について補論1—」『北方文化研究』6
- 大井晴男 1972b「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について—擦文文化とオホーツク文化の関係について 補論2—」『北方文化研究』6
- 大井晴男 1973「附 オホーツク式土器について」『オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会
- 大井晴男 1975「枝幸町目梨泊遺跡の調査について」『枝幸教育』9
- 大井晴男 1982a「遺跡・遺跡群の型式論的处理について—オホーツク文化の場合—」『北海道考古学』18
- 大井晴男 1982b「土器群の型式論的変遷について（上）—型式論再考—」『考古学雑誌』67-3
- 大井晴男 1982c「土器群の型式論的変遷について（下）—型式論再考—」『考古学雑誌』67-4
- 大井晴男 1982d「オホーツク文化の諸問題—その研究史的回顧—」『シンポジウム オホーツク文化の諸問題—その起源・展開・社会・変容—』学生社
- 大井晴男 2004「『貼付文系オホーツク式土器群』の『型式論』的変遷を考える—「型式論」のためのノート(3)—」『北海道考古学』40
- 大井晴男 2009「所謂『山内型式論』の形成過程をめぐって—「型式論」のためのノート(5)』『古代文化』60-4
- 大井晴男編 1982「オホーツク文化関係文献目録」『シンポジウム オホーツク文化の諸問題—その起源・展開・社会・変容—』学生社
- 大井晴男・大場利夫編 1973『オンコロマナイ貝塚』東京大学出版会
- 大井晴男・大場利夫編 1976『香深井遺跡（上）』東京大学出版会
- 大井晴男・大場利夫編 1981『香深井遺跡（下）』東京大学出版会
- 大川 清 1998『北海二島—礼文・利尻島の考古資料（手控・拓図）—』窯業史博物館
- 大谷敏三・田村俊之 1982『末広遺跡における考古学的調査（下）』千歳市教育委員会
- 大塚和義 1968「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」『物質文化』11
- 大西秀之 2009『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』同成社
- 大沼忠春 1996「北海道の古代社会と文化—7～9世紀—」『古代王権と交流』1（古代蝦夷の世界と交流）名著出版

- 大沼忠春・工藤研治・中田裕香「総説 続縄文・オホーツク・擦文文化」『考古学資料大観』11（続縄文・オホーツク・擦文文化）小学館
- 大貫静夫 1998『東北アジアの考古学』同成社
- 大場利夫 1956「モヨロ貝塚出土のオホーツク式土器」『北方文化研究報告』16
- 大場利夫 1962「モヨロ貝塚出土の金属製品」『北方文化研究報告』17
- 大場利夫 1968「北海道周辺に見られるオホーツク文化—II 礼文島・利尻島—」『北方文化研究』3
- 大場利夫・児玉作左衛門（1958）「根室国温根沼遺跡の発掘について」『北方文化研究報告』11
- 岡田淳子ほか 1978『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 奥野 充ほか 2004「白頭山苦小牧（B-Tm）テフラの年代学的研究」『中国東北部白頭山の10世紀巨大噴火の歴史的効果』（『東北大学東北アジア研究センター叢書』16（谷口宏充編）
- 小野哲也 2000「刀子からマキリヘー考古学的なアプローチによる—」『北大史学』40
- 利部 修 2001「須恵器長頸瓶の系譜と流通—北日本における特質—」『日本考古学』12
- 利部 修 2010「本州北端の刻書土器—北方域の研究史と系譜—」『北方考古学の世界』すいれん舎
- 利部 修 2011「本州北端の刻書土器—道教的信仰から見た「木」の考察」『旃檀林の考古学—大竹憲治先生還暦記念論文集』（同論文集刊行会編刊）
- 金盛典夫 1976『ピラガ丘遺跡—第Ⅲ地点発掘調査報告—』斜里町教育委員会
- 金盛典夫 1981「須藤遺跡・内藤遺跡発掘調査報告」『斜里町文化財報告』1
- 金盛典夫・相田光明 1984「オホーツク文化の終末と擦文文化の関係」『考古学ジャーナル』235
- 菊池徹夫 1972a「トビニタイ土器群について」『常呂』東京大学文学部
- 菊池徹夫 1977「オホーツク文化と擦文文化・アイヌ文化との関係」『シンポジウム オホーツク文化の諸問題発表要旨』北海道大学文学部附属北方文化研究施設
- 菊池徹夫 1989「オホーツク文化」『よみがえる中世』4（北の中世 津軽・北海道）平凡社
- 菊池徹夫 1997「オホーツク文化・擦文文化とアイヌ文化」『環オホーツク海文化のつどい報告書』5 紋別市立郷土博物館

- 菊池俊彦 1976 「オホーツク文化に見られる靺鞨・女真系遺物」『北方文化研究』
10
- 菊池俊彦 1977 「第1部会 オホーツク文化の起源と周辺諸文化との関連」『シン
ポジウム オホーツク文化の諸問題発表要旨』北海道大学文学部附属
北方文化研究施設
- 菊池俊彦 1993 「オホーツク文化とニヴフ民族」『環オホーツク』 1
- 菊池俊彦 1995a 『北東アジア古代文化の研究』北海道大学出版会
- 菊池俊彦 1995b 「オホーツク文化の小鐸に寄せて」『近藤義郎古稀記念考古文集』
同編集委員会
- 菊池俊彦 2003 「大陸との交流」『新北海道の古代』 2 北海道新聞社
- 菊池俊彦 2004 『環オホーツク海古代文化の研究』北海道大学出版会
- 菊池俊彦 2009 『オホーツクの古代史』（平凡社新書491）平凡社
- 菊池俊彦 2011 「環オホーツク海域の超遠距離交易—セイウチ牙製品をめぐっ
て—」『アイヌ史を問いなおす』（蓑島栄紀編）勉誠社
- 木山克彦 2006 「アムール女真文化の土器に関する基礎的整理と編年について」
『北東アジア中世遺跡の考古学的研究（平成17年度成果報告書）』
- 木山克彦 2007 「渤海土器の編年と地域差について」『北方圏の考古学』 I 北
海道大学大学院文学研究科
- 木山克彦 2009 「パクロフカ文化における陶質土器の展開」『中世東アジア周縁
世界』同成社
- 木山克彦 2010a 「渤海土器の展開と周辺地域」『考古学ジャーナル』 605
- 木山克彦 2010b 「靺鞨罐」の成立について」『北東アジアの歴史と文化』北海
道大学出版会
- 木山克彦 2011 「靺鞨・渤海・女真の考古学」『アイヌ史を問いなおす』（蓑島栄
紀編）勉誠社
- 木山克彦 2012 「ロシア沿海地方の渤海土器」『海と考古学』 8
- 清野謙次 1969 「モヨロ貝塚」「オンネトウ遺跡」『日本貝塚の研究』岩波書店
- 熊木俊朗 2000a 「香深井5遺跡出土「元地式」土器について」『香深井5遺跡発
掘調査報告書』礼文町教育委員会
- 熊木俊朗 2000b 「近年のオホーツク文化研究展望—北海道北部・サハリン・ア
ムール河口部の土器研究を中心に—」『祭祀考古』 16・17（合併号）
- 熊木俊朗 2004 「サハリンの様相」『北東アジアシンポジウム サハリンから東
日本海域における古代・中世交流史の考古学的研究』中央大学文学部史

学科

- 熊木俊朗 2006「オホーツク土器と擦文土器の出会い—まったく異なる系統の出会いと融合—」『公開研究発表会 異系統土器の出会い—土器研究の新しい可能性をもとめて—』科学研究費補助金（基盤B）課題「異系統土器の出会い」研究班
- 熊木俊朗 2007a「サハリン出土オホーツク土器の編年—伊東信雄氏編年の再検討を中心に—」『北東アジア交流史研究』塙書房
- 熊木俊朗 2007b「オホーツク海北西海岸・アムール河口部・サハリンの土器編年図」『北東アジア交流史研究』塙書房
- 熊木俊朗 2010a「オホーツク土器の編年と地域間交渉に関する一考察—北見市（旧常呂町）栄浦第二遺跡9号竪穴オホーツク下層遺構出土土器群の再検討—」『比較考古学の新天地』同成社
- 熊木俊朗 2011「オホーツク土器と擦文土器の出会い」『異系統土器の出会い』（今村啓爾編）同成社
- 熊木俊朗 2012「香深井A遺跡出土オホーツク土器の型式細別と編年」『東京大学考古学研究室研究紀要』26
- 河野広道 1934「北海道の古墳様墳墓に就いて」『考古学雑誌』24-2
- 河野広道 1935「北海道石器時代概要」『ドルメン』4-6 岡書院
- 河野広道 1949「北海道の先史時代」『北海道先史学十二講』北方書院
- 河野広道 1955「先史時代史」『斜里町史 第1編』斜里町
- 河野広道 1958「先史時代篇・原史時代篇」『網走市史』網走市役所
- 越田賢一郎編 2003『奥尻町青苗砂丘遺跡』2（重要遺跡確認調査報告書3）北海道埋蔵文化財センター
- 小嶋芳孝 2003「渤海末期の土器様相—クラスキノ土城石組井戸から出土した土器について—」『北アジア調査研究報告会発表要旨』（第4回）
- 小嶋芳孝 2006「ロシア沿海地方南部・初期女真文化における遼の影響」『東北亜細亜地区遼・金・蒙・元時期的城市—国際学術検討会—』（井出靖ほか編）中央大学文学部史学科
- 小嶋芳孝 2007「環日本海交流史の様相」『北東アジア交流史研究—古代と中世—』塙書房
- 小嶋芳孝 2010「クラスキノ城跡井戸出土土器群の考察」『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会
- 児玉作左衛門 1948『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会出版部

- 後藤寿一 1934「札幌市及其付近の遺跡・遺物の二三に就いて」『考古学雑誌』27-9
- 後藤寿一・曾根原武保 1934「胆振国千歳郡恵庭村の遺跡について」『考古学雑誌』24-2
- 小林幸雄・高橋興世 1995「オホーツク文化文化遺物に関する分析研究」『北の歴史・文化交流研究事業』研究報告』1995
- 駒井和愛 1948「オホーツク式遺跡と大陸的文物」『歴史』1-2
- 駒井和愛 1952a・b「北満州発見の土器二、三に就いて」「遼代の素焼土器に就いて」『中国考古学研究』世界社
- 駒井和愛 1957「オホーツク文化とスキタイ文化」『史観』50
- 駒井和愛 1959「古代アイヌの竪穴住居址」『考古学雑誌』44-3
- 駒井和愛 1964「モヨロ貝塚の発掘」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』（駒井和愛編）（下）東京大学文学部
- 駒井和愛編 1963「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」（上）東京大学文学部
- 駒井和愛編 1964「オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡」（下）東京大学文学部
- 駒井和愛・吉田章一郎（1964）「モヨロ貝塚の発掘（続）」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』（下）東京大学文学部
- 小柳正夫・因幡勝雄 1969「栄遺跡調査略報」『もうぺっと』創刊号
- 後藤寿一・曾根原武保 1934「胆振国千歳郡恵庭村の遺跡について」『考古学雑誌』24-2
- 犀川会編 1933『北海道原始文化聚英』民族工芸研究会
- 斎藤 忠 1933「千島択捉島出土の土器及び石器」『考古学雑誌』23-6
- 榊田朋広 2007～2012「北海道（続縄文・擦文・オホーツク文化以降）」『考古学ジャーナル』572・586・601・615・628・642
- 榊田朋広 2010「トビニタイ文化研究の現状と課題」『異貌』28
- 酒寄雅志 2001『渤海と古代の日本』校倉書房
- 佐藤隆広 1994『目梨泊遺跡』枝幸町教育委員会
- 佐藤達夫 1964b「オホーツク遺物の特色」（駒井和愛と共著）『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』（下）東京大学文学部
- 佐藤達夫 1972「擦紋土器の変遷について」『常呂』東京大学文学部
- 佐藤和利・佐藤隆広 1986『豊岩5遺跡・豊岩7遺跡』稚内市教育委員会
- 澤井 玄 2007「北東日本海域の古代・中世土器編年—北海道の7～13世紀の土器編年について—」『北東アジア史交流史研究』塙書房

- 清水信行編 2013『論集 沿海州渤海古城 クラスキノ古城の機能と性格』青山学院大学クラスキノ古城発掘調査団ほか
- シャフクノーフ、E.V.・ワシーリエフ、Yu.M. 1993「アムール流域のパクローフカ文化：年代推定と民俗解釈の問題（1989）」『北海道考古学』29（天野哲也訳）
- 梶田光明・梶田美佐子 1982『史跡 標津遺跡群伊茶仁カリカリウス遺跡発掘調査報告書』標津町教育委員会
- 鈴木 信 1996「千歳市オサツ(2)遺跡(2)」『北海道埋蔵文化財センター調査報告書』103
- 鈴木琢也 2004「擦文文化期における須恵器の拡散」『北海道開拓記念館研究紀要』32
- 鈴木琢也 2010「古代北海道と東北地方の物流」『北方世界の考古学』（小松正夫編著）すいれん舎
- 鈴木琢也 2011「北海道における7～9世紀の土器の特性と器種組成様式」『北海道開拓記念館研究紀要』39
- 鈴木琢也 2011「北日本における古代末期の交易ルート—十～十一世紀を中心として—」『古代中世の蝦夷世界』高志書院
- 瀬川拓郎 2005a『アイヌ・エコシステムの考古学』北海道出版企画センター
- 瀬川拓郎 2007『アイヌの歴史』講談社
- 瀬川拓郎 2011「古代北海道の民族的世界と阿部比羅夫遠征」『海峡と古代蝦夷』（小口雅史編）高志書院
- 瀬川拓郎 2012「続縄文・擦文文化と古墳文化」『古墳時代の考古学』7 同成社
- セルゲイ・ネストロフ 2007「中世前期アムール川流域諸民族の民族文化史を物語る土器」『北東アジア交流史研究—古代と中世—』塙書房
- 高島孝宗 2004『目梨泊遺跡—目梨泊遺跡における埋蔵文化財発掘調査報告書—』枝幸町教育委員会
- 武田 修 1995『栄浦第二・第一遺跡』常呂町教育委員会
- 田中哲郎・種市幸生 2001「ウサクマイN遺跡」『北海道埋蔵文化財センター調査報告書』156
- 種市幸生 1997「香深井5遺跡出土のⅡ群A類土器の位置」『礼文町香深井5遺跡発掘調査報告書』礼文町
- 種屯内遺跡調査団編 1998「種屯内遺跡第2次発掘調査概要（1996年）」『利尻研

究』17

- 千葉大学文学部考古学研究室編 2012『北海道礼文町浜中2遺跡 第2次発掘調査概報』
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2013a『北海道礼文町浜中2遺跡 第3次発掘調査概報』
- 千葉大学文学部考古学研究室編 2013b『浜中2通信』3（図3）
- 塚本浩司 2010「道東部への擦文文化の拡大—トコロチャシ跡遺跡オホーツク文化堅穴住居地出土の土師器（擦文土器）から—」『第11回北アジア調査研究会発表要旨』
- 塚本浩司 2012「トコロチャシ遺跡オホーツク地点7号堅穴出土の擦文土器（土師器）について—北海道東部の初期段階の擦文土器—」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学人文社会系研究科
- 東亜考古学会 1939『東京城』（東方考古学叢書 第5冊）
- 東京大学文学部考古学研究室編 1972『常呂』東京大学文学部
- 常呂町教育委員会 1986『トコロチャシ南尾根遺跡』同委員会
- 豊原照司・坂井通子 2009『カモイベツ遺跡』斜里町教育委員会
- 中澤寛将 2008「土器生産とその組織化—渤海から女真への展開プロセス—」『アジア遊学』107
- 中澤寛将 2013「クラスキノ城址出土土器の特質とその意義」『論集 沿海州渤海古城クラスキノ古城の機能と性格』青山学院大学文学部
- 中田裕香 2004「オホーツク・擦文の土器」『考古学資料大観』11（続縄文・オホーツク・擦文文化）小学館
- 名取武光 1948a「北海道モヨロ貝塚とオホーツク式文化」『民族学研究』13-1
- 名取武光 1948b「昭和23年度 モヨロ遺跡発掘の新事実と考察、モヨロ堅穴住居址の実年代を決定する唯一の資料—遼時代の素焼土器、昭和16年第十一号堅穴出土—」『モヨロ遺跡と考古学』札幌講談社
- 名取武光 1948c『モヨロ遺跡と考古学』札幌講談社
- 名取武光 1974「遼時代の素焼土器—モヨロ十一号堅穴出土—」『名取武光著作集 アイヌと考古学(2)』北海道出版企画センター
- 名取武光・大場利夫 1964「モヨロ貝塚出土の文化遺物」『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』（下）東京大学文学部
- 新潟武彦 1950「北海道利尻郡仙法志村政泊先史時代遺跡調査概報」『利尻郷土研究』5

- 日本大学文学部史学研究室編 1966『樺太の遺物』(鎌田重雄編) 日本大学文学部
- 野村 崇・平川善祥編 1982『ニツ岩』(北海道開拓記念館研究報告7)
- 函館市立博物館編 1983『児玉コレクション目録Ⅰ(先史・考古資料編)』
- 馬場 脩 1940「樺太の考古学的概観」『人類学先史学講座』17
- 日高 慎 2001「東北北部・北海道域における古墳時代文化の受容に関する一試考—古墳時代中期を中心として—」『海と考古学』4
- 日高 慎 2003「北海道大川遺跡出土土器の再検討」『考古学に学ぶ』Ⅱ(同志社大学考古学シリーズⅧ)
- 平光吾一 1929a~c「千島及び弁天島出土土器片に就いて(1~3)」『人類学雑誌』44-4・5・7
- 福沢仁之ほか 1998「年縞堆積物を用いた白頭山—苫小牧火山灰(B-Tm)の降灰年代の推定」『Laguna(汽水域研究)』5
- 藤井誠二 1997「K39遺跡 長谷工地点」『札幌市文化財調査報告書』55
- 藤井誠二 2001「K39遺跡 第6次調査」『札幌市文化財調査報告書』65
- 藤本 強 1965「オーソック文化の葬制について」『物質文化』6
- 藤本 強 1966「オホーツク土器について」『考古学雑誌』51-4
- 藤本 強 1982「書評 大場利夫・大井晴男編 香深井遺跡(上・下)」『考古学雑誌』68-2
- 藤原郁代編「古代の北海道」『天野ギャラリー第117回展』天野ギャラリー
- 北海道開拓記念館編 1983『発掘された北の文化—続縄文・擦文・オホーツク文化』(第23回特別展)
- 北海道開拓記念館編 1999『アイヌ文化の成立』(常設展示解説書2)
- 北海道開拓記念館ほか編 2008『古代北方世界に生きた人々—交流と交易—』
- 北海道埋蔵文化財センター編 2004『遺跡が語る北海道の歴史—(財)北海道埋蔵文化財センター25周年記念誌—』
- 前田 潮・山浦 清編 1992『礼文島浜中2遺跡の発掘調査』礼文町教育委員会
- 松田 功・村本周三ほか 2011「ウトロ遺跡」『斜里町文化調査報告』32
- 栢本 哲 1986「オホーツク文化のイヌの裝飾肢骨について」『考古学研究』33-2
- 三辻利一 1994「渤海国上京龍泉府址、および、大川遺跡出土黒色土器の蛍光X線分析」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』
- 三辻利一 1996「美々8、オサツ2、キウス5遺跡出土の須恵器、土師器の蛍光

X線分析」『千歳市オサツ2遺跡(2)』

- 三辻利一・小野裕子・天野哲也 2008「オホーツク文化の集団間・対外交流の研究—1. 礼文島香深井1遺跡出土陶質土器の蛍光X線分析—」『極東民族史におけるアイヌ文化の形成過程』（北海道大学総合博物館研究報告4）
- 箕島栄紀 2001『古代国家と北方社会』吉川弘文館
- 箕島栄紀 2012「十～十一世紀の北東アジア情勢と「北の中世」への胎動」『北から生まれた中世日本』高志書院
- 箕島栄紀・宮 宏明 1997「内外面黒色土器と大陸系土器について」『蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集』（日本考古学協会1997年度秋田大会）
- 宮 宏明編 2000『大川遺跡における考古学的調査』1（余市川改修事業に伴う1989～1994年度大川遺跡発掘調査報告書 第1分冊（総説・堅穴状建物跡篇）余市町教育委員会
- 森 秀之 2004『茂漁7遺跡・茂漁8遺跡』（北海道恵庭市発掘調査報告書）恵庭市教育委員会
- 柳澤清一 1999a「北方編年小考—ソーメン紋土器とトビニタイ・カリカリウス土器群の位置—」『茨城県考古学協会』11
- 柳澤清一 1999b「北方編年研究ノート—道東「オホーツク式」の編年とその周辺—」『先史考古学研究』7
- 柳澤清一 2000「南千島から利尻島へ—道東編年と道北編年の対比—」『東邦考古』24
- 柳澤清一 2001「礼文・利尻島から知床・根室半島へ—道北・道東「オホーツク式」・トビニタイ・擦紋土器編年の対比—」『先史考古学研究』8
- 柳澤清一 2003「北方編年再考 その(1)—川西遺跡編年と「オホーツク式」伴出事例の謎—」『(千葉大学)人文研究』32
- 柳澤清一 2004「北方編年再考 その(2)—トビニタイ・「カリカリウス土器群」の細分について—」『(千葉大学)人文研究』33
- 柳澤清一 2005a「北方編年再考 その(3) 斜里地方における「トビニタイ土器」編年の予察—ピラガ丘・須藤遺跡からオタフク岩遺跡へ—」『(千葉大学)人文研究』34
- 柳澤清一 2005b「擦紋末期土器と「トビニタイ土器群Ⅱ」の成立—根室半島から知床半島・斜里方面へ—」『社会文化科学研究科研究プロジェクト報告書』96（北方文化の中のアイヌ）

- 柳澤清一 2006a 「道北における北方編年の再検討 その(1)—モヨロ貝塚から内路・上泊遺跡へ—」『古代』119
- 柳澤清一 2006b 「北方編年再考 その(4) 北海道島・南千島における北大式～擦紋Ⅳ期の広域編年—北海道島人と「オホーツク人」の接触を探る—」『(千葉大学) 人文研究』35
- 柳澤清一 2006c 『縄紋時代中・後期の編年学研究—列島における小細別編年網の構築をめざして—』(千葉大学考古学研究叢書3)
- 柳澤清一 2007a 「北方編年再考 その(5) ニツ岩遺跡編年の再検討—擦紋Ⅲ期における道東と道央の対比—」『(千葉大学) 人文研究』36
- 柳澤清一 2007b 「「ヒグマ祭祀遺構」出土のトビニタイ土器群Ⅱの位置」『物質文化』83
- 柳澤清一 2007c 「北方島嶼の先史考古学—礼文島の編年秩序をめぐる—」『北海道大学総合博物館ニュース』15
- 柳澤清一 2008a 「北方編年再考 その(6) トビニタイ土器群Ⅱの小細別編年について」『(千葉大学) 人文研究』37
- 柳澤清一 2008b 「「カリカリウス土器群」の小細別編年について」『物質文化』85
- 柳澤清一 2008c 『北方考古学の新天地—北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し—』六一書房
- 柳澤清一 2009a 「北方編年再考 その(7)—擦紋Ⅱ期における道央・道北、サハリン島南部の編年対比—」『(千葉大学) 人文研究』38
- 柳澤清一 2009b 「道北における北方編年の再検討 その(2)—青苗砂丘遺跡編年と北方古代史研究—」『古代』122
- 柳澤清一 2009c 「標津町伊茶仁第1遺跡 第5次調査の概要」『第10回 北アジア調査研究報告会 発表要旨』
- 柳澤清一 2010a 「道東擦紋Ⅳ期における小細別編年案の検討(予察)」『人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書』128 (土器型式論の実践的研究)
- 柳澤清一 2010b 「擦紋Ⅲ期における環宗谷海峡編年の検討」『比較考古学の新天地』同成社
- 柳澤清一 2010c 「北方編年再考 その(8) 道東における新北方編年体系の検証—灰白色(Ma-b)火山灰を「鍵」層として—」『(千葉大学) 人文研究』39
- 柳澤清一 2011a 「北方編年再考 その(9) 擦紋Ⅳ期における擬縄貼付紋土器の小細別編年」『(千葉大学) 人文研究』40
- 柳澤清一 2011b 『北方考古学の新展開—火山灰・蕨手刀をめぐる編年体系の見

直しと精密化—』六一書房

- 柳澤清一 2011c「道北編年の再検討 その(3) 「南貝塚式」から見た環宗谷海峡編年案の検討—道央から礼文島・モネロン島・サハリン島へ—」『古代』124（奥付：2010. 9）
- 柳澤清一 2011d「道東部における竪穴住居跡の変遷とトピニタイ土器群Ⅱの成立—知床・斜里・標津を中心として—」『物質文化』91
- 柳澤清一 2012a「環根室海峡圏における貼付紋系土器の対比—南千島への「駆逐・移動」説をめぐって—」『千葉大学文学部考古学研究室三十周年記念 考古学論攷Ⅰ—岡本東三先生の退職とともに—』六一書房
- 柳澤清一 2012b「[北方編年再考 その(10) 北見国「枝幸1・2・5号竪穴」出土土器の検討—「南貝塚式」と「終末期」の擦紋土器をめぐって—」『(千葉大学) 人文研究』41
- 柳澤清一 2012c「旧常呂町・斜里町における新北方編年案の検証—「Ma-b」・「Km-5a」火山灰を「鍵」層として—」『古代』126（奥付，実際の刊行：2011. 11→2012. 5）
- 柳澤清一 2012d「新北方編年案とB-Tm火山灰から見た蕨手刀の副葬年代—青苗砂丘遺跡から目梨泊遺跡・モヨロ貝塚へ—」『古代』126（奥付，実際の刊行：2011. 11→2012. 5）
- 柳澤清一 2012e「ウサクマイN遺跡出土のソーメン紋土器の年代—土器から見た「B-Tm」火山灰の疑問点—」『古代』127（奥付，実際の刊行：2012. 1→2012. 5）
- 柳澤清一 2012f「いわゆる「元地式」（「接触様式」）編年の再検討」『古代』128（奥付，実際の刊行：2012. 2→2012. 5）
- 柳澤清一 2013a「佐藤達夫のポスト「擦紋V」期編年の成り立ち」『岡内三眞先生古稀記念論集 技術と交流の考古学』同成社
- 柳澤清一 2013b「北方編年再考 その(11) いわゆる「東大編年」と山内博士の「北方編年」説の相克」『(千葉大学) 人文研究』42
- 柳澤清一 2013c「オホーツク文化」と擦文文化の接触、同化・融合説—展示図録「模式図」の成り立ち、その実態—」『型式論の実践的研究Ⅰ』（人文社会科学研究所研究プロジェクト報告書251）
- 柳澤清一 2013d「道北編年再考 その(4) 礼文島浜中2遺跡（1990年度）調査資料の編年」『古代』131
- 柳澤清一 2014a「香深井1(A)遺跡における「オホーツク式」年代観の改訂—異

- 系統土器の「混在」と「共伴」の狭間から—『(千葉大学) 人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書』276 (型式論の実践的研究Ⅱ)
- 柳澤清一 2014b「北方編年再考 その(12) 擦紋Ⅱ・Ⅲ期における通説「道東」編年の検証—トコロチャシ遺跡の新「共伴」資料に触れて—」『(千葉大学) 人文研究』43
- 柳澤清一 2014c「道北編年再考 その(5) 紋別・枝幸・稚内における「オホーツク式土器」と擦紋土器の編年—道北・道東「地域差」編年説の見直し—」『古代』132
- 山浦 清 1983「オホーツク文化の終焉と擦文文化」『東京大学考古学研究室研究紀要』2
- 山内清男 1935「縄紋式文化」『ドルメン』4-6
- 山内清男 1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1
- 山内清男 1939『日本遠古之文化』(補註付新版) 先史考古学会
- 山本哲也 1988「擦文文化に於ける須恵器について」『国学院大学考古学資料館紀要』4
- 八幡一郎ほか 1966「西月ヶ丘遺跡」『根室の先史遺跡』東京教育大学
- 米村喜男衛 1932「北海道網走町出土土器について」『史前学雑誌』4-3・4
- 米村喜男衛 1950『モヨロ貝塚資料集』野村書店・網走郷土博物館
- 米村喜男衛 1961「川西遺蹟調査報告」『網走郷土博物館シリーズ』
- 米村喜男衛編 1949『北海道先史学十二講』北方書院
- 米村哲英 1970『ピラガ丘遺跡』斜里町教育委員会
- 米村 衛 2004『北辺の民—モヨロ貝塚—』(シリーズ「遺跡に学ぶ001」) 新泉社
- 米村 衛・梅田広大 2009『史跡最寄呂貝塚史跡等登録記念物保存修理事業発掘調査報告書』網走市教育委員会